

---

# exorcism - illusion deity -

森村芥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

exorcism - illusion deity -

### 【ZPDF】

Z7895C

### 【作者名】

森村芥

### 【あらすじ】

いたつて普通の高校生、嵯峨野京右はある朝自らを悪魔だと名乗る少女に出会う。それから、京右の非現実的な日常が始まった…

## Take 1 A new moon

始まりはなんだつたのか…今ではもう思い出す」とすらできない。それでもその長い廊下を歩む事を止めようとはしなかつた。それは自身の意図ではなく…意識とは別に体だけが動いている感覺…

殺せ

頭に響く言葉の意味が理解できずに、小さく脳髄が痛む。それでも足は止まらない。

一定のリズムを崩さない足音を響かせながら、その体は廊下の奥へと進んでいく。

殺せ

それが自分ではない自分だと気がついたのはいつだつたか…多分気がついたときには遅かつたのだ…もつと早く…もつと確かにその存在を感じ取つていれば…

何も変わりはない

そう…それに抗う術をもたないのだから、その存在を知つていた所でどうにも出来なかつただろう。それでも思つてしまつた…犯した罪を目にした時…

キガツイティレバト

掌にこびり付く嫌な温かさと滑りを持つた液体…赤く…紅く…アカク…それは網膜を侵していく…

この日、少女は……忘れられない夢を見た。

バシッと目が覚めた。珍しい事だと頭を捻りながらも、偶然とはいえ折角にも手に入れた気持ちのいい目覚めを手放す気などない。

「う…うあ

ぐぐつと腕を伸ばして伸びをしながら、意識とは違つて寝起きの体を起こす。辺りを一度見渡してから一度だけ大きな欠伸をついた。暫くそうしていたが、ずっとそんな風に寝ぼけていては学校に遅れてしまうと、立ち上がる。

一人暮らしを始めたのは今年の春。過保護とも言える両親の反対を押し切り、高校二年に上がった今年ようやく許しを得た。

まあ、こうして暮らし始めてみるとわかる苦労も耐えないわけだが…とりわけ苦手なのは、この朝食の用意…実を言うとちゃんとフライパンを持ったのさえ今年に入つてからと…俺が、そう簡単に料理が出来るわけもなく…

「ああ…仕方がない…今日もわびしく食パンだ」

自分以外誰もいないと言うのに、知らず言葉が口をついて出た。一人暮らしをすると独り言が多くなるというの、あながち間違いではないのかもしれない…

朝食の為にだけ購入したトースターにパンを挟みながら、俺はテレビの電源を入れた。朝ということもあって定番と言つて問題ないでありますニユースが流れている。これと言つて興味があるわけではないが、それとなく情報収集にでもなるだらうと方耳を向けたまま、焼きあがった食パンを口に運ぶ。

嵯峨野京右：知らぬ人間が見れば何の暗号だと思いたくなるこれが、俺の名前だった。ちなみに嵯峨野でさがの、京右できょうすけと読む。もつとテストの時に書きやすい名前にしてくれと文句の一つや二つ言いたくなるが、今更なので口にはしない。

「ちょっと早いけど行くか…」

食パンの残りの一切れを口に放り込み、時計を横目で見てから立ち上がる。

家でボーッとしているよりは学校の机に突っ伏して眠つていた方がいいという、何とも変な考へが頭を掠めながらも、俺は家をいつも

の様に後にした。

今となつてはもう見慣れた町の風景。実家から通う時は違うこの景色が実は気に入つてたりする。同じ町なのだから、なんの代わり映えもしないといつてしまえばお仕舞いだが、まあそれはそれよつは気分の問題だ。

学校までの道のりはゆっくり歩いても一十分弱。どこかへ寄り道しても全く問題はない時間ではあるのだが、まだ朝の九時も回っていない事もあり、開いている店なんてコンビニかパン屋…ファーストフード店ぐらいのものだ。

俺はそのまま真っ直ぐと学校へと向かう。同じ事の繰り返しで毎日が進んでいく。それを良しとするか悪しとするかは人それぞれだが、少なくとも今の俺はそれも悪くないと思っている。

だらだらと歩いていても、結局は学校へと無事にたどり着く。そのまま校門を潜り抜け、教室の自分の席へと腰を落ち着け、俺は机に突っ伏した。

今日も何事もない平和な日。欠伸が出るのはじ愛嬌。おやすみなさい平穏な日々よ……

一人自己完結し、俺は授業中も睡眠を貪ることを決め込み眠りについた。

目が覚めると、時間はもう昼休みになつていた。教室を見渡すと、ちらほらと食堂へ向かっている生徒の姿が目に入る。そこで俺もやつと思い出したかのように、重い腰を上げた。

それにしても学校の食堂とはどうしてこうも混みあうものなのか…ざわざわと人混みにもまれながら、食料の調達を終える。もちろんのこと座る場所などない食堂を後にするのも、いつもの事だ。

「あ、嵯峨野！」

さつさと教室にでも戻ろうとした所を、知った声に呼び止められた。振り返った先にいたのは、一人の男子生徒。茶色というよりは金髪に近い髪の色の癖毛、見間違えることは少ないだろうと思われる友人、東上修斗だった。

「よう、何してんだ？」

同じクラスだというのに見かけなかつたから、サボりかと思ったのだが、よく考えてみれば今の今まで寝ていたのだから気がつかなくとも無理はない。

「昼食べてたに決まってるだろ、学校来たらお前寝てるしさ？」

「あー悪い、今日は目が覚めるの早くてな…眠かったんだよ」

ため息混じりにいわれた言葉に、俺は適当に返す。修斗とはこの学校に入学して以来の友人で、まあそれなりに仲良くはやつているはずだ。とは言つても、別に学校の外でまで遊ぶような仲ではないが

……

「じゃあまだ知らないだろうね」

「ん? 何かあつたのか?」

もつたいたいぶつたようなその態度に首をかしげると、修斗は黙つたまま辺りを見渡し、その目のある場所で留めた。つられるようにして俺もその方向に目を向ける。

「……」

図らずとも一瞬その目を疑つた。目を向けたその先にいたのは、否が応でも目立つ男の姿。同じ学生服を着ているということで、学生なのはわかつたが、あんな目立つ奴がいれば今まで耳に入つてこないはずがない。

「フェルデナント・ルーシュ…海を渡つた向こうから来た留学生だつてさ…」

いつの間にか目を別の方向へと向けていた修斗が咳く様に言つ。見るからに染めたものとは違う青銀の髪に、緑の瞳。留学生だというのだから、それは不思議な姿ではないのだが……見慣れないせいか、嫌に違和感が残つた。

「あーあ、嫌だよねえ…ああいうタイプ」

その言葉に俺は何も言わない。修斗が性格上、無駄に田立つ人間が嫌いなのはもう今更のことだし、それをビリーハウス始めるつもりもないからだ。

「まあ、僕達には一生関わらないだろ？…どうでもいいんだけどさあ」

どうでもいい割には嫌に突つかるな、などとは思つても口にしない。修斗はそういう性格なのだ。その上嫌に根に持つタイプなので、こうこうの時には何も言わないのが一番の得策。

その後に俺達に田立つ会話はなく、そのまま予鈴がなった。

今日の最後の授業の終わりを告げる鐘に、俺は伸びをする。今日も特に変わったことなく平和に一日が終わつたわけだ。

そんな事を思いながら帰り支度をしていくと、見知つた顔に声をかけられる。

「嵯峨野くん、ちょっといいかな？」

控えめに問いかけてきた彼女は、折原百々撫。このクラスの委員長でもあり、かなりの優等生で通つていて。そんな折原が俺に用があるといえば、教員からの伝言か何かと相場が決まつていた。

「何か用か？」

「うん、これ…先生からなんだけど……」

そう言って手渡されたのは一枚のプリント、内容も見ずに俺はそれを鞄の中へと押し込んだ。一応その様子を見届け、折原は俺の席に背を向ける。帰り支度も整い、俺はそのまま教室を後にした。

学校が終わった後、俺はそのままの足でバイト先へと向かう。一人暮らすするようになつてからというもの、親からの仕送りはあるものの、それだけでは少しばかり足りない事に気がついた。これ以

上親に求めるだけは避けたかった俺は、どうにかじつにかバイトを始めたわけだ。

「おはよじゅざいります」

裏口から店に入り、俺は見知った顔に挨拶をする。

「おはよう」

返事を返してくれたのは、この店に俺より前から勤めている須川菜月さん。名前だけを聞くとどうしても女人の人を想像してしまうのが、れっきとした男の人。実際に聞いてはないが年齢も多分二十代後半だと思う。ちょっと長めの黒い髪を後ろで一つに束ねていて、昔に事故で見えなくなつたという左目は、今も傷が残つていた。俺はさつさと従業員の制服に着替え、開店準備をしている菜月さんを手伝いはじめる。

店は「Deity」という名のどこにあるような、バー…とは言つても若者が好むような少しはしゃれた店だ。そう大きくはない店なので、従業員は三人もいれば大丈夫だろうとこの程度。

「今日も店長は留守ですか？」

その問いかけに、菜月さんは困ったように頷いた。「今日も」というのはそれが毎日の様に続くから…この店は店長が趣味で持つているようなもので、経営はほとんど菜月さん任せらしい。店長は別にデザイナーという仕事を持つていて、店に顔を出すのはまれだつた。

「さて、準備はこれぐらいでいいだろ」

その言葉を皮切りに、今日も店が開店される。

客の流れは少しずつだが、それなりにあった。見知った顔馴染みの客から、始めてくるであろう客まで、その姿はさまざまだが、ゆっくりと時間が流れしていく。落ち着いた店の雰囲気が俺はそれなりに気に入つており、仕事も一つも苦ではなかつた。

「いらっしゃいませ」

カラッと店の扉が開かれ、反射的に声を返した俺はその客の姿を見

て一瞬止まつてしまつ。男一人に女一人…それ自体は大して珍しくもない組み合わせだが、思わず息を呑んでしまつた。

一人目の男はかなりの長身でがたいもよく、身長はおそらく百八十は軽く超えている。二人目の男は身長こそ高くはないが、線の細い落ち着いた雰囲気。最後の女は、長い髪をふわふわと揺らし身長も低く外見だけを見れば幼いといつのに、それを感じさせない凜々しさがあつた。何よりもその三人は、髪が綺麗な銀や金…それと同じようく透き通るような青い目をしていた。

「…席に案内してもらえますか？出来れば…あまり邪魔されないところがいい」

そう顔に見合つた綺麗な声で丁寧な日本語を発したのは、銀の髪をした一人目の男。長い髪の毛は後ろで三つ編みにされている。俺はその声に急かされるように、三人を一番端の席へと案内した。

「『注文は…』

とりあえずできる限りの平静を装いながら、俺はいつも通りそういう口にする。

「うーん…お一人ともどうします？」

「俺は何でもいい、お前が決める」

メニューさえ手に取らずに、濃茶の髪の一人目の男が口にする。その言葉に呆れながらも、一人目の男は金髪の女に目を向けた。

「私もシルアに任せると…ただアルコールは止めて」

それだけ口にして、女は黙つてしまつた。その反応を聞き届け、二人目の男…シルアは俺に目を向けてくる。目の前で異国の人間が流暢な日本語で会話をしている事だけでも目が回りそうだといつに、急にその一人と目が合つて、俺は目を丸くしてしまう。

「じゃあ、僕はベリーーを…その男にはソノラを、その女性にはアルコールじゃないものを頂けますか？」

「かしこまりました、少々お待ちください」

にっこりと微笑んだシルアに、俺は頭を下げて戻つていく。その注文内容を菜月さんに伝えると、すぐに菜月さんがグラスを用意する。

それを手伝いながら、俺は三人の方へと目を向けてた。

「…珍しいか？」

「え、あ…はい」

それに気がついていたのか、目を向けずに菜月さんが声をかけてくる。少しばかり気が引けたものの、俺は素直に頷いた。

「そうか、まあ…変な偏見は捨てるに越したことはないぞ」少しだけ笑みを零しながらそう言つた菜月さんの意図がよくわからず、俺は少しだけ首をかしげる。そうこうしているうちに準備を終えたのか、菜月さんが三つのグラスを渡してきた。そのグラスを持つて、俺は再びそのテーブルへと足を向ける。

「お待たせしました」

そういう、俺は男一人にカクテルグラスを、女にジュースの入ったグラスを差し出した。軽く頭を下げて立ち去ろうとした俺を、思わず声が止める。振り向くと女がジッと俺に視線を向けていた。

「これは…何？」

そう言つた女に他意は見受けられない。ただ純粋に差し出された飲み物が何なのかを聞いているのだろう。

「え…っと、ただのアップルジュースです…」

だからそう答えるほかになかった。ただのとは言つたものの、この店だけの工夫はしている。ただそれを説明しろという事ではないだろうと、俺はそう答えた。

「…アップル…そう、ありがとう」

そう言つて女は飲み物を飲み始める。それを見届け、こんどこそ俺はテーブルを後にした。

その姿も他の客と同様に暫くして店を後にし、それからは至つて変わつた様子もなく、店は閉店の時間を迎えた。趣味で運営している店といつこともあり、営業時間は夕方五時から十二時の五時間だけだった。

だからこそ、ここをバイト先に選んだというのもあるのだが…

「お疲れ様、先に上がつていいぞ」

片づけを続けながら、そう言った菜円さんの言葉に俺は頭を下げて  
帰り支度を始めた。もう口付は変わり辺りは真っ暗。慣れた事とは  
いえ、早く家に帰つて眠りたいと思うのも本音なわけで…

「お疲れ様でした、また明日」

「ああ、お疲れ様」

店を後にして、外に出ると冷たい空気が顔をかすめる。時季はもう  
十一月半ば、そろそろパートが恋しくなつてくる季節ではある。こ  
れからどんどんバイト帰りが辛くなると想つと億劫ではあるが、仕  
方がないかと俺は帰路を急いだ。

「はあ、はあ…はあ、はあ、はあ…」

吐く息は徐々に苦しいものへと変わつていく。けれどその足を止め  
るわけにはいかなかつた。足を止めれば彼女を待つてているのは確実  
な『死』だけだつたのだから…いや、もしかするとその逆なのかも  
しれない。

死を与える側になるか、死を与える側になるか……そのどちら  
も彼女は認めたくはなかつた。だから今もこつして足を止めること  
なく走り続けている。

ずっと逃げてきた…街を涉り、山を越え、海をも渡つた。そうして  
何も知らぬ土地へ来て……それでもまだ逃げ続けていた。  
終わりなどないのかもしない…安息などありはしない、平穀など  
迎えることはできない。それでも逃げ続ける。何を求めているのか、  
それはもう彼女自身が見失つてしまつた答えたつた。

「…つは、はあ…」

息が詰まる。汗が頬を伝つた。すぐ背後に感じた気配は、ずっと執  
着に自分を追つてきたものだつた。

「やつと止まつたな…」

一人の男がそう高らかに笑つた。嘲笑つてゐるのだろうか…逃げ続ける彼女をやつと追い詰めて嬉しくなつたのだろうか…

「これ以上無駄な旅は続けたくないですからね」

もう一人の男が呴いた。『無駄』だというその言葉が胸に突き刺さる。彼女一人の命などどうでもいいかのように…

「諦めて…神の御心に従いなさい」

小さな影が彼女を冷たく見つめた。生まれてくるべきではなかつたモノを見るような冷たい瞳で…

そうして彼女は思つ、神様など迷信極まりないと…そんなものはイナイノダト…

「…S a v i n g t o t h e S a t a n !」

だから願つた、神ではない何かに…聞き届けられないであろうその願いを声にした。助けてくれと…その手をとつて欲しいと…救いを求めた。

「A m e n」

小さな影が手を上げ、彼女の目の前が真つ暗になる。

何かが切れる音がした

目が覚めた。昨日と同じように気持ちのいい目覚めが出来るとは思つても見なかつたためか、暫くボーッとしてしまつ。窓の外を見ると、気持ちのいい青空が広がつてゐる。

「……朝か」

呴く呴くうちにそう言つた後、やつとの思いで俺はベッドから抜け出した。昨日と同じ繰り返しで朝食のパンを食べながら一コースに目をやり、身支度を整える。そうしてまた家を後にした。そうしてその日も昨日と変わらず、少しばかりの偶然と出会いながら一日を迎えるのだと思つていた。

その姿を見つけるまで……

いつもの通学路、行きかう人々の間をすり抜けながら学校へと向かう。二十分足らずで終わってしまう通学時間、けれど俺は目の端に入ったソレに気をとられてしまった。それはどこにでもあるような小さな公園のゴミ捨て場。いつもならば気にも留めないその場所が何故だか妙に気にかかつた。

俺は何かに引き寄せられるようにして通学路から抜け、そちらに足を向ける。よりもよって朝からそんな場所に行きたくはないと思うものの、どうしてか足は止まらなかつた。

「……」

ゴミ捨て場の前まで来て足を止める。腐臭を防ぐために、いつもは扉が堅く閉じられ鍵がかけられているはずなのだが、今日は鍵がはずされていた。いや、外されたのではなく壊されたのだ……足元に壊れた錠をつけ、俺はそう頭の中で切り替えた。

ゆっくりとその扉に手をかける。音もなく開いたその奥からはゴミが発するような異臭はしなかつた。けれどその代わりに……きつい血の臭いが鼻をつく。

「……っ」

息を呑んだ。足が動かなくなつた。田の前に……自分の足元に……あつたのは血塗れの人だつた。頭の中の思考が止まる。この場から逃げ出したい衝動、動搖、恐怖、頭の片隅にそんな感情が生まれては、混ざり合つて止まつていく。

そうしてやつと逃げ出そうとした足を……その血塗れの人につかまれた。

「……!？」

バランスを崩すようにその場に尻餅をつき、引きつった顔でその人間に目を向ける。田が会つたのは、幼い少女だつた。グレイに近い長い髪、それとは対照的なほどに白い肌、無垢な少女のような顔立ち……そして紫色の瞳。

「…あ、あ

まるで生まれたての子供のよう、言葉にならない声を漏らした。死をイメージさせる出血量…弱々しさ、その体には血がこびり付いている。

恐ろしさからか…無垢な少女への同情か…それとも…その救いを求める瞳のせいか…俺は動けないでいた。

「…助、けて…」

泣きそうな声だった。あまりにも辛そうな声だった。伸ばされた手…俺は自分の意思とは反してその手をとる。

その瞬間、彼女は目を見開いて驚く…まるで今まで誰もそうしてくれなかつたかのように、初めて手を握つてもらつたかのように、そうしてゆつくり…痛々しい体を起こして俺に近づいた。

「…Contract

消え入りそうな声で呟き、彼女は俺に触れるような口付けをした。ゆつくりと顔を離し、彼女は小さく笑う。

間近で見た彼女のその顔は…驚くほど綺麗だった。

「…あ

声が出ない。会つたばかりの少女、しかも見るからに命に危険がありそうな少女にキスをされるとは思つても見なかつた。警察なり病院なりに連絡しなければならないと想つはずなのに、体は一向に動こうとはしない。

「…ありがとう」

そう口にした彼女の声は先ほどに比べて、かなりはつきりとしていた。そういうえば、先ほどに比べ顔も青白さがなくなつていて。

「…あ、病院に」

やつとの思いで体を動かせるようになつた俺は、ズボンのポケットに入っていた携帯に手をかけようとする。が、それは田の前の少女によつて止められた。

「…必要ないから…大丈夫」

そう小さく声にする。どこをどう見れば必要ないといつのだらうか、

今まで血だらけだった人間がどうして……

そこまで考えて思考が停止した。ずっと彼女自身から流れていったと思っていた血は、彼女の体から流れているものではなかつた。その体には一つとして傷はなく、その血もすでに乾いている。

「……どういづ」

まさか目の前の少女は人殺しだとでもいうのだろうか……そう思つては見るものの、目の前の少女を見て、その考えはすぐに打ち消される。その真つ直ぐな目は純粹そのものだつた。

「……謝らなきや、私……このままだと貴方を巻き込んでしまう」自分に言い聞かせるようにそう言葉にした彼女。俺はその意図するところが分からず首を傾げてしまう。

「……信じてもらえない……それは分かつてゐる。でも言わないと……」ぎゅっと胸の前で手を握り締めて彼女は前を向く。俺と目が合つ一度だけ目を閉じた後、真剣なまなざしを向けた。

「……私は、ある人達に追われています……命を狙われてるんです……信じてもらえないのは分かつてます……でも、正直に……私が分かることだけを話します」

命を狙われているという言葉に、俺は息を呑む。何でもない少女に言われば冗談だと思つたに違ひない言葉は、彼女の体にこびり付いた血が信じさせた。

「私は……人ではないんです」

目を見開いた。目の前にいる……自分と同じ姿をしたモノが人ではないと……そう彼女は口にしたのだ。

「……悪魔というものをご存知ですか?……私の中にはその悪魔と呼ばれるものがいます」

「……悪魔って、そんなの迷信だろ?」

そう口にするしかなかつた。そんなものはありはしないと……昔の人間が作り出した創造の産物だと……教徒でもなんでもない人間ならばそう思つてはいるはずだ。

「そう……思つのが普通です。でも違う……悪魔はいる……貴方達が目

にしないのは、それを狩る側の人間がいるから……私は、その人達に追われているんです」

その目は嘘を述べているようなものではなかつた。それでも信じられるわけがない。

「……信じなくても構いません……ただ一つだけ、お願ひがあります」「願い……？」

ジッと押し黙つた彼女に目を向けたまま、俺はその言葉を待つた。  
「……今日一日は、外に出ないでください……」人の人達に見つかれば、あなたも危険な目にあうことになる」

胸の前で硬く手を握り彼女は真剣にそう口にする。今日一日外出るなどいわれても、そういうわけには行かない……学校はもう今更間に合わないだろうし、休んでもいいだろうが、バイトを休んでしまつては生活費にかかるわる。

そんな嘘か本当かもわからない言葉に従うわけにはいかなかつた。

「……分かつた」

けれど、目の前の少女がそれで引き下がらないだろうと、俺は口だけでそう約束する。ほっとしたような笑みを漏らし、彼女は立ち上がりつた。

「……ありがとう、本当に……」

静かにそう微笑んだ彼女はどこか寂しげにそう口にして、俺の横を通り抜けていく。彼女の気配が完全になくなつた後も、俺は暫くその場から動けずじつと座り込んでいた。

結局学校はサボつたものの、俺は夕方には家を後にし「D e i t y」に向かつた。いつも通り何事もなくたどり着き、彼女の言葉は「冗談」だつたのかと俺は小さくため息をつく。

「どうかしたのか？」

そう声をかけられ、俺はパツと顔を上げる。そこには不思議そうな表情を浮かべた菜月さんがいた。

「いや、何でもないです……なんか今日変なことあったもんや……」

「変なこと?」

せりふと流そつと思つた言葉に、間髪要れず菜月さんが問い合わせ返してくる。それで俺は思わず頭を搔くよつとして目をそらす。別にその事をいうのが憚られるわけではなく、少しでも心配した自分自身を悟られるのが嫌だった。

「……あー……実はですね……」

それでもこのまま誤魔化しては二つかボロが出るだろつと、俺は今朝の事を搔い摘んで話し始めた。

話を聞き終えた後、菜月さんは黙つて考え込み始めた。まさか話を真に受けたのではなかろうかと、俺は苦笑いを零す。

「……その話、嘘じやないんだな?」

問い合わせられた言葉は予想もしなかつたほど、深刻めいた声だつた。俺は思わず目を丸くして顔を向けるが、菜月さんは相変わらず真剣な顔をしている。

「……嘘では、ないですか?……どうかしたんですか?」

その様子があまりにも普通ではなかつたからだろつか、俺はそれを打ち消すように笑いながら返事をする。すると菜月さんは何を思つたか、開店準備をしていたにも関わらず、白い紙にclose dと書き殴り、その紙を店の扉に貼り付けた。

「あの……菜月さん?」

その突然の行動にしぶりもどりになつてはいる俺に、真剣な目が向ける。られる。

「……今日は店は開かない、明日は学校も休みだつたな……明日の朝、自宅に帰らせるほうが無難だろつか」

何を言つてはいるのか分からぬ。あんな話を信じたところのだらつか……あんな冗談だとしか思えない話を……

「あの……菜月さん?」

だからこそ、俺はその事を問い合わせようとする。けれどその前に……

…来客がやつてきた。

「……」

ドンドンと激しく扉がたたかれる。店の定休日は日曜日だけだ…だからこそ開いていると思つて来た常連客か何かが扉を叩いているのだろう。鳴り止むことのない音に、菜月さんに目を向けるがジッと扉を見つめたまま開けにいこうとはしない。だから、俺がその方向へと足を向けようとした。

「止める」

小さく、静かにとめられる。それは聞いたこともない様な冷たい声だった。睨み付ける様に扉に目を向けたまま、菜月さんは動こうとはしない。その間も音は鳴り止まない。

「でも…」

「……感じたか…つけてきたのか…どうひらせよこのまま…」  
はいれないか…」

俺に対する言葉ではなかつた。独り言のように呴いたその声に、俺は言葉を失う。何がどうしたというのか、激しく扉を叩き続ける客に何があるというのか…俺には分からなかつた。

「…囮が必要だな」

ソレだけを口にして菜月さんは自分の携帯に手をかけ、どこかへと電話をかけ始める。

「…俺だ、悪いが困つたことになつた…ああそう、大丈夫か?…

…そうだな、任せる。撒けたら店に…そうだ、ああ…頼んだ」

相手の声は聞こえないため、何を話しているのかは分からない。それでもそれが平穩な事でないのぐらには理解できた。

「……あの」

「…すぐにいなくなる」

そう言つた声とほぼ同時だつただろうか、扉を叩く音は止み、そこにはいたであろう人の気配も去つていく。菜月さんに目を向けると、ジッと視線を返された。

「……京右、お前…入っちゃいけない世界に入り込んだみたいだな

…」

俺がその言葉の意味が理解できたのは… もう少し後のこと。

その日は、月が見える事のない新月の夜だった。

イライラしていた。あの口あの時ようやくこの旅が終わると思つていたのだ。それにも関わらず今もまだその存在は彼女の前に立ちはだかつていた。

「姫、厄介なことになったみたいですね」

部屋の扉を空け、入つてきたのは線の細い男だつた。彼女、アーシュラ・シルバニアの護衛として日本にやつてきた青年でその名をシリアル・ヴァゼリアという。シルアがアーシュラを姫と呼ぶのは愛称を込めているだけで他意はない。

そう、例え彼女がシルアや他の使徒の上に立つものであつとも…そこに他意はないのだ。

アーシュラ・シルバニア…その名はこの『世界』に関わりのある人物ならば誰もが知る名前であった。『世界』というのはこの世を表す言葉ではなく、この限られた彼女たちの世界の事。神を信仰し、神の手足となつて悪魔に鉄槌を下す「教会」と呼ばれる組織……アーシュラはその教会総帥。悪を最も嫌い、神を最も敬愛する聖乙女。

悪魔や吸血鬼と呼ばれる存在があつた…それは迷信ではなく、彼女たちの生きる世界においては極当然に存在する…赦しがたいものだつた。それを神に代わり始末していくのが、教会に所属する「使徒」と呼ばれる信者達の使命。

最近では態々ハンターだと名乗る者も少なくない。アーシュラにとつてはそれすらも下賤極まりない事だった。

「どうかしたの…？」

問いかけるとシルアはその場にひざまずいて小さく頭を下げる。

「…カルネラが…契約者を見つけたようです…」

その言葉にアーシュラは返事を返さず顔を歪める。赦しがたい……神に仇なす存在が未だこの世に息づいていることが……

「契約者と思われる人物については、田星がつきましたが……」

「そう……」

ゆっくりと立ち上がったアーシュラは部屋に掲げられた天使のレリーフに手を合わせる。

「全ては神の御心のままに…… Amen」

アーシュラのすべては敬愛する神の為に……それに仇なすものは何者であろうと排除する……それが彼女の誓いだった。

暗い世界……日は落ち黒い空が町を覆っていた。

「姫さん！」

ビルの屋上にてその姿を待っていたアーシュラとシルアは、声に振り返る。そこにいたのはシルアと同様に使徒であり、護衛の一人、ヴィグル・ルグラント。百八十をゆうに超える大男で、その姿はどこか威圧的だった。

「……参った参った……例の契約者をつけてたんだが、邪魔が入つてな」

ふざけた様子でそう口にするヴィグルに、アーシュラは静かに顔を向ける。言葉を聽かずともその意図する所が分かつてか、ヴィグルはそのまま言葉を続けた。

「ヴァンパイアだ……しかもそちらの雑魚じゃねえ……夜の姫君さんだ」

「……姫……君」

ヴィグルの漏らした言葉に、あからさまにアーシュラの顔がゆがむ。そこでハツとしたようにヴィグルが口を押された。

「すまん、このあだ名は厳禁だったな……フィルネスだ」

そう正確な名を口にする。それでもアーシュラの表情は戻ることなく、歪んだままだった。

「… フィルネス……ずっと姿を見せないと思つたら、こんな島国にいましたか……どうします？姫」

呆れたようにシルアは漏らす。そしてアーシュラへと指示を仰いだ。シルアやヴィグルにとつてはアーシュラの指示が全てなのだ。彼女が殺せと言えば殺し、彼女が生かせといえば生かす。

「…どうするもこうするもないわ……神に仇名するものは何者であろうと排除する…」

「んじゃ、フィルネスを追いますか…」

冷たく言い放つたアーシュラの言葉に、ヴィグルはそつとアーシュラを肩に担ぎ上げ、シルアと共にそのままビルの上を飛び降りるよう後にした。その姿を追つて……

人のいない夜道を全速力で走りぬける。かすかに覗くその背中だけを追い続けた。

「使徒」と呼ばれる信者達は信じられない身体能力を持つものが多い、それは決して生まれ持つたものではなく、教会によってそうされたものが殆どだった。しかしそれは悪魔や吸血鬼といった者達に対抗しうる唯一の手段でもある。

「使徒」になるといふ事は、その力を受け入れるといつことに他ならなかつた。それでも限界はある……元々人間の体である器にそれ以上の方を押し込むわけにはいかない。

「ちつ、追いつけやしねえ…」

だからこそ、今現在もその姿を見失わないように追いかけることしか出来ずについた。

「…Amen」

アーシュラがその背中に向かつて、手に宝石を持って掲げ小さく咳く。声と同時にアーシュラの手から宝石が弾丸のように放たれた。気がついたよつてその背中は、田も向げずに弾丸と化した宝石を難なく避けきる。

「……変です」

そんな様子にシルアが呟くように声を漏らす。

「どうしたよ？」

「おかしいと思いませんか？…どう考へても彼女の力は今の我々を超えて…その間に差を引き離せないんです…いや、引き離そうとしてないんですよ…」

視線は真っ直ぐその背中に注いだままシルアがそう告げる。少しの間だけアーシュラが黙つて考へ込むが、すぐに目を向けた。

「…凶だとでも言つの？」

「…おそらくは…噂に聞く彼女がそんな性格とも思えませんが…噂に聞く彼女…フィルネスというヴァンパイアは残酷無慈悲、誰一人としてその心を許さないようなものだと聞く。だからこそその考えに至つたのが今更だつた。

「…分かつた、追うのは止めて」

アーシュラのその声に二人は同時に足を止める。そのまますぐに追つていたその背中は見えなくなつてしまつた。

「…姫、どうします？」

黙つたままのアーシュラに、シルアが問い合わせる。ヴィグルも黙つてその言葉を待つが、暫くアーシュラは言葉を発しようとした。

「…当初の目的を優先させるわ…ただあのヴァンパイアが関わっているとなると、予定を見直す事が必要でしょうけど…」

「了解…じゃあ今日はおとなしく引き上げるか…」

仕方がないという風にヴィグルは息をついた。アーシュラは黙つて空を見上げる。月の無い真っ暗な…嫌な夜だと思つた。

あれからどれ程の時間がたつただろうか、菜月さんはすつと押し黙つたままで、俺達の間には目立つた会話はなかつた。体を動かして

いないせいでいつもより長く感じる時間の流れを、俺は持て余す。

「……きたか」

誰に言うでもなく菜月さんが立ち上がった。店の入り口の方に目を向けるとそこには確かに人影のようなものが見える。ゆっくりとその扉が開かれ、俺は信じられない姿を目にした。

透き通るような銀色の癖のついた長い髪、雪のような白い肌、血のよつや深い真紅の瞳。その姿は……この世のものじゃなかつた。

「……お待たせ、一応撤いておいたわ……私にかかるれば造作もないし

綺麗に微笑んで見せたその雰囲気は年場もいかぬ少女のよつだつた。

「悪いな……で、厄介な事なんだけどな……」

その女性の頭を撫でる様に笑つた後、菜月さんの視線がこちらに向かれる。もちろんの事、話をしていた女性もこちらに目を向けた。目が合つてドキッとする。

「ふうん……君が……」

ゆっくりと近づいてきた女性は品定めでもするように俺に視線を投げかけた。居心地が悪いのではなく、これはそつ……きつと恐怖だった。小さく細い女性らしい体……けれどその目の前の女性が恐ろしくてたまらない。

「フィルネス……あんまり脅すなよ、可哀想だろ」

「あはっ、なんだか昔の夏樹見てるみたいで楽しくつて」

呆れた様な菜月さんの声で、フィルネスと呼ばれた女性の雰囲気が一変する。年相応のふんわりとした雰囲気に変わつた。

「血口紹介するわ、私はフィルネス……よろしくね坊や」

そう年も変わらなく見える女性に、坊やと呼ばれる違和感にさいなまれながらも、俺は頭を下げる。にっこりと微笑んだフィルネスさんはそのまま近くの椅子へと腰掛けた。

「ねえ夏樹……どこから話すの？ 全部？」

「……そうだな、とりあえず教会のこと……その後に俺達の事を話した方がいいだろ」

フィルネスさんの近くの椅子に腰を下ろしながら菜月さんが呟く。

理解したようにフィルネスさんが俺に向き直った。

「じゃあ…話してあげましょ…先に言つておくわ、信じる信じないは貴方の自由よ…信じなかつたせいで命を落としても私は知らないから」

笑顔だつた。まるでどいつもいいといつかのよくな綺麗な笑顔…背筋が寒くなるのを感じずにはいられない。

「この世にはね…貴方が知らない事なんて沢山あるのよ……そう、ずっとずっと昔から…それは続いてきたんだもの…」

すつと目を伏せ、何かを思い出すように口を開いた。

昔…それは気が遠くなるほど昔の事…神を敬愛する一人の少女がいた。

その少女は神に祈りを捧げ、様々な奇跡を起こし、いつしか聖乙女と呼ばれるようになつていた。彼女は深く神を敬愛していた…それ故、神と対峙する存在を許せずにいた。

それは悪魔と呼ばれる存在達。創造の産物でもなく、迷信でもなく…それは確かに存在していた。悪魔は人を騙し、貶め、呪い、殺した。聖乙女は神に祈り続ける。『神の裁きをお与え下さい』と…『

愚かなる者に鉄槌を』と…しかし聖乙女は気がついていた。

神は直接裁きを与える事は出来ぬだと…だからこそ…我々が神の使徒として悪を討たねばならぬのだと…

聖乙女は剣を手に取つた。神に仇名すものは我々が討つのだと…同じ精神を持つ信者を集め…聖乙女は『教会』と呼ばれる組織を作り上げる。ただ悪を討つために…聖乙女はその全てを神に捧げたのだ。

教会と悪魔の間で行われた戦争は長く続いた。人々は祈りを捧げ聖乙女の勝利を願い、悪魔達の敗北を願つた。

悪魔達の持つ圧倒的な力の前に、教会は幾度も破れる。窮地に陥った聖乙女は、ある時一つの魔術書を見つけた。その魔術書にはこの世のものではない魔術が記されていた。聖乙女は神に感謝する……これで悪を討つ事が出来るのだと……そうして聖乙女は魔術を使い、『使徒』と呼ばれる対悪魔戦闘員を作り始める。

それから戦いは一転した。

圧倒的だと思われていた悪魔達は撤退を余儀なくされ、教会から送り込まれていった使徒達はことごとく悪魔を蹴散らしていった。数年之後、戦は終わりを告げていた。結果は圧倒的な教会側の勝利。

人々は喜び、聖乙女を崇め、神を崇拜した。

けれど……聖乙女は喜びを見せなかつた。聖乙女は言つ。

『悪はまだ滅びていない……その全てが潰えるまで……私はこの身を戦いに捧げよう』

聖乙女は言つ……

『神に仇名するものは何者であろうと、排除する……それが私に『えられた使命だ』

聖乙女は言つ……

『その全ての悪が途絶えるまで……私は剣を置くことはない』

聖乙女の戦いに……終わりがくる事はなかつたのだ。この世の全ての悪を討つ……それは不可能だつた。けれど聖乙女は神にそう使命を託された。それは……残酷な使命だつた。

いつしか……人々は姿を現さなくなつた悪魔を忘れ、教会の存在さえもその記憶から消していった。数少なくなつた悪魔は教会の手を逃れ、思つままに各地へと散つていく。残つた『使徒』達は、その姿を追い戦い続ける。

今も尚……その悪が生き続ける限り……剣を置くことは許されていない。

時計の音が響いた。聞かされた話は昔々のおとぎ話のよつた短いもの…

「…まあ人間がそう長く生きるわけはないから、聖乙女つていうのは代々教会の総帥に与えられるあだ名だと思つけどね」

あつからかんとそう言い放つたフィルネスさんは菜月さんが用意したカクテルを、ちびちびと口に含む。

「その…正直信じられませんけど、それが本当の話だつたとします。もしそうなら…俺が出会つた少女は本当に悪魔で、教会つていう組織に本気で狙われてるつていうんですか？」

「そうよ、ちなみ私達も狙われてるわ」

間髪いれずに返事が返つてきた。それは予想外の言葉も乗せて…

「菜月さん達…も？」

「…話してないのよね？」

そう、俺ではなくフィルネスさんは菜月さんに問いかけるように顔を向けた。それに無言で頷く。

「…そう、じゃあ教えてあげる。私はね、教会が悪とするもの一つ、ヴァンパイアよ」

背筋が寒くなつた。頭の片隅では冗談や嘘だと思つてゐる自分がいる。けれどそれとは別にそれを真に受けている自分もいた。

「貴方たちがどんなイメージを持つてるか知らないけど、きっと少しばかり違うでしょ…私達だつて進化しないわけじゃないもの…」

…日の光も十字架もにんにくも、なんの効果もないわよ  
くすくすと笑う。頭の芯がひりひりした。悪い夢でもみてるんだと自分自身を言い聞かせたかった。

「夏樹もね…私と一緒に。今から四十年ぐらい前かしら?…私の血を分けてヴァンパイアになつたわ」

「四十年?」

耳を疑うしかなかつた。どう見ても一人ともそんな年齢には見えな

い……けれどファイルネスさんは、迷うことなくやつ捕げた。だからもう……それが本当なんだと信じるしかなくなる。

「私達の詳しい話はいいの、それよりも……今の問題は坊やよ」  
そう話を切り替えられて息が詰まった。少女は言つた……巻き込んでしまつと……それが何を示すのか……今の俺にはわからない。けれどそう言つた少女の目が切実なもので、それが只事でない事だけは理解できた。

「坊やが出会つたつて言つ子、その子は多分本当に悪魔でしょうね……一時的ではあるけれど、坊やはその悪魔と契約したことになつてる」

「契約？」

鸚鵡返しに聞くとファイルネスさんが小さくため息を漏らして、暫く考え込んだ。

「どうかしたのか？」

「ん……ちょっとね、その子普通の悪魔じゃないわ……本来の悪魔との契約は、もっと手順が必要だもの……私は悪魔達の契約なんてそういう詳しくないけど……それに悪魔はもつと利口的よ……契約者には利益しか教えないわ」

菜月さんに問い合わせられ、悩みながらもファイルネスさんはそう口にする。自分自身で言いながらも納得できない様に頭をかしげた。

「まあ、悩んでも仕方ないし……行きましょうか」

「へ？」

急に立ち上がったファイルネスさんに、俺は目を丸くする。ジッと俺を見下ろしたまま小さくため息をついた。そしてそのまま店の入り口までたたずた歩いていつてしまつ。

「その子を探しに行くわよ坊や、自分の事ぐらう自分で出来るでしょ？」

その言葉は、俺の拒否権などないと最初から訴えていた。

ずるずると足を引きずる。胸が苦しい……足が重い……立ち止まつてしまいそうだった。

「……っ」

空を見上げるが、月は見えない……新月の夜だった。一体いつまでこんな事を続ければいいのだろうか……一体どこまで行こうというのだろうか……気がついたときにはもう教会の追っ手から逃げていた。彼女にはそれ以前の記憶が曖昧でわからない。

ただ逃げなければならないという事だけはわかつた。だからこそ逃げ続けている。安心して眠つた事などここ数年なかつた。彼女の手をとつてくれる人間など……今まで出会つたことはなかつたのだ。

「……はあ」

足を止めた。思い出す……この手を初めてとつてくれた人の事を……はじめて知つた他人の手の温もりを……

初めてのはずなのに……それはどこか懐かしく、泣きそうになるほど悲しかつた。今もそう、思いだすだけで胸が苦しくなる。眉を顰めてその場に蹲る。行きかう人々の姿はもうなく、そんな彼女を気に留める人はいない。

「……」

自分自身の手を見つめる。もうその温もりはとっくに消え去り、指先は冷たく凍えていた。それでも忘れられずにいる。その一瞬の優しさに縋つてしまつたからこそ、彼女は契約をしてしまつたのだろう。

う。

彼女の名はカルネラ。教会に追われる前の記憶は曖昧で分からぬ。ただ自分自身で理解しているのは、己が悪魔だという事と、曖昧な過去だけ……。気が遠くなるほど長い旅と、使徒との戦闘により疲労したカルネラは無意識に『契約者』を求めていた。

カルネラ自身、自分が普通の悪魔でない事は理解できていた。言つなれば不完全なモノだった。人を陵駕した身体能力や魔術を使うだ

けで、カルネラの体は恐ろしく衰弱する。自分自身の体が支えきれなくなるほどに…

カルネラにとつての契約者とは、その疲労や反動を契約者に受け流す事で軽減するものだった。しかし今のカルネラと契約者との契約は完全なものではなく、カルネラの衰弱はとどまつてはいなかつた。

「……っ」

衰弱をとめるには完全な契約が必要な事はカルネラ自身理解している。無理矢理にでも契約を完了させるべきだった。けれど…

「…だめ… そんなの…」

カルネラは自らそれを拒否した。契約者が背負うであろう苦しみを重々承知していたからこそ、手をとつてくれたあの人物とだけは契約を完了させたくはなかつた。不完全な契約はいつか自然に切れるから…

冷たい風がほほを撫でた。悪魔と名乗った少女を探す… 言うは容易く行うは難し、まさにその言葉通りだつた。この町がそう大きな都市出ないことは理解しているが、だからといってたつた三人で探すには無理がありすぎる。

「坊や、その子の特徴は？ 覚えてない？」

その問いかけに俺は記憶をたどつた。出会つた少女は灰色の髪に紫の瞳… そして漆黒の服を身にまとつていた。けれど覚えているのはただそれだけ… 手がかりとしては余りに頼りない。

「…灰色の髪に紫の目、黒の服です」

思い出したまま口にしてみるが、自分でため息をつきそうになつた。けれどファイルネスさんは文句一つも言わずにあたりを見渡し、そのまま俺に目を向ける。

「いいわ、見つけてあげる… どうするかは貴方が決めなさい」

一言、それだけを言つてファイルネスさんは一瞬で目の前から姿を消

した。それはまさに消えるという表現が当てはまるほどの早さ。そう…自分の目を疑うほかななかつた。彼女はたつた一蹴りで宙を舞い上がるよつとビルの屋上へと飛躍したのだ。

「…つ」

「驚いてる暇はないぞ…俺達も探そう」

腰が抜けそうになる俺を奮い立たせるよつと、菜月さんが背中を叩く。その姿に驚いた様子は微塵も感じられなかつた。信じられない状況に眩暈を覚える。

「一人先走るなよ…今はお前も狙われる可能性があるんだ」  
そう言う菜月さんの後を追つよつと、俺はその場を駆け出す。今はただその後ろについていくしかなかつた。

暫く走り続けるがそれらしき姿は一向に見つからない。見つからないだろうと落胆しかけていたところ、菜月さんが足を止めた。どうやら携帯がなつていてるらしく、ポケットから取り出した携帯で会話をはじめる。

「…フィルネスか？ああ…まだだが…って、京右に？あ、ああ…何を話しているのかは全く理解できなかつたが、不意に菜月さんから携帯を手渡される。どうやら俺に出るといつ事らしい。俺はそのまま受け取り、電話に出た。

『もしもし、坊や？』

耳に入つてきたのはフィルネスさんの声。俺は曖昧に返事を返す。

『見つけたわよ…どうも大変みたい』

「大変？」

もつたいぶつた言い方に俺は頭を悩ませる。

『教会の人間に襲われるみたいね…どうするの？』

悠長な声だつた。自分自身は関係のない事だとでも言つよつた冷たい声。

「どうするつて…！そんなの」

『助けに行くつて事は、契約するつて事？もし契約破棄するつもり

なら、放つておきなさい……悪魔が死ねば契約は自動的に破棄されるから』

俺の言葉をさえぎるように続けられたフィルネスさんの言葉に、俺は押し黙った。彼女が死ねば契約は破棄される。それはきっと俺がこの物事と一切関わりをなくすという事……そうすれば俺には平穏が戻つてくるのだ。

『一度でも彼女を助ければ、坊やは教会に敵としてみなされるわよ』突き刺さつた。言葉が出なくなる。敵とみなされる……その言葉は俺も危険に巻き込まれるという事をしめしていた。いや、そんな生易しいものじゃなくて……俺も殺されると言つたのだろう。

『坊や……一時の感情は身を滅ぼすわ……ジッとしてなさい』その声は一転して優しいものだった。フィルネスさんの言つとおり、このまま放つておくのが一番いい選択なのだとと思つ。だから俺はそのまま返事を……

助けて

小さく頭の奥で声が響いた。それは俺が手をとつた彼女の声……命を狙われているにも関わらず、俺の心配をしていた少女の言葉。

「……どこですか？」

分かりましたと言つははずだつた口は、そう言葉にしていた。何も言わずにフィルネスさんは場所を教えてくれる。そのまま電話を菜月さんに渡し、掛けられた声にも振り向かず、俺は彼女のいるであろう場所へと駆け出した。

駆け出した京右を追うような真似を菜月はしなかつた。渡された電話がまだつながっている事を確かめ、耳に当てる。

「フィルネス……お前冗談すぎるぞ」

『坊やさ、夏樹の昔にそつくりよね』

電話越しに聞き取れる声はどこか楽しげだった。フィルネスは須川菜月の事を夏樹と呼ぶ、それは彼の本当の名が夏樹というから……と

うに捨てた名ではあつたが、夏樹自身もフィルネスにだけはその名で呼ぶ事をよしとしていた。

「大丈夫なのか？」

『うん、平気よ……教会の人間も一人だし、契約者を得た彼女はきっと強いから』

その声はどこか確信めいていた。だから夏樹もそれ以上は問い合わせない。こういう場合のフィルネスの判断はいつでも正しいと確信していたから……

走り抜ける。人のいない町をただ目的に向かつてがむしゃらに走つた。どうしてと自問自答したくなつた。利益などないのに……この先にあるのは自分に対する不利益だけだというのに……足は止まらなかつた。

どうしてかは分からぬ。出会つた少女があまりにも無垢な目をしていたからか……それとも手をとつた時の少女の笑みが泣きそうな程に悲しそうだつたからか……どちらにせよ自分には関係ないはずだつた。

でも足は一向に止まらない。出来ないのだ……放つておけば殺されると分かつている少女を見捨てるなど……出来るわけがなかつた。

「……つは、はあ

走り抜けた先に見つけたのは地面に蹲つた少女と……一人の男。

その男と目が合つて、俺は息を呑んだ。見た事がある。その青銀の髪も……緑の瞳も……見覚えがあつた。

「……邪魔が、入つたな」

呴いた言葉に弾かれる様に俺は我に返つて、少女に駆け寄る。目を見開く少女をよそにその手を引いて駆け出した。フラフラになりながらも少女は懸命に俺の後をついてくる。握つた手は……信じられないぐらい小さかつた。

「……っ、あ！」

足が縛れたのか、少女がその場に倒れこむ。急いで駆け寄つて体を起こす。目が合つた少女は不思議そうな顔をしていた。

「……て……どうして？」

そう聞かれた。その答えを俺は持つていない。だからそのまま黙り込んでしまう。けれどずつとこつしているわけにはいかないと、俺はもう一度彼女の手をとる。

「逃げられるわけないだろ……」

すぐそこに男がいた。目が合つて体が凍りつく……そうして冷めた頭でフィルネスさんの話を思い出す。『使徒』は普通の人間ではないのだと……走つてなど逃げ切れるわけがないのだと……だから言つたのだ。フィルネスさんは……

『助けに行くつて事は、契約するつて事？』

反響するその言葉に俺は息を呑む。握つた少女の手から微かな温もりが感じられた。

『一度でも彼女を助ければ、坊やは教会に敵としてみなされるわよ』そう分かっていて、忠告されてここに来たのだ。だつたらその答えはもう決まつている。俺は少女に目を移す。まだ不思議そうな表情をしている少女の手を強く握り締めた。

「……戦つてくれ」

「……え？」

独り言のような言葉に彼女は目を見開く。俺はその手だけを握り締めて少女から目を離し、男を見据える。

『助けに来たんだ……契約が必要なら構わない……戦つてくれ』

まるで男に宣言するかのように俺はそうハツキリと口にした。その言葉で男の顔が歪んだ。俺の事をハツキリと敵だと確信したかのようだ。

「うに……

「でも……」

「このままだつたら二人とも殺されるんだろ！」

少女の言葉を遮る様に声を荒げた。そうだ……目の前の男は俺の事を

ハツキリと敵だと認識した……俺を殺す対称だと決定したのだ。だからこそ、そうさせまいと男は俺達の方へと駆け出した。

「私の名はカルネラ……呼んで下さい……」

少女が俺の手を取つて叫ぶ。

「カルネラ！俺はお前と……契約する！……」

秒速：数メートルはあつた間合いがすぐそこまで詰められていた。俺はカルネラに言われるまま少女の名を叫ぶ、それと同時にカルネラが触れるだけの口付けをした。

「……Contract」

男は目の前。振り下ろされる拳が閃光の様に目を覆い、俺はそのまま硬く目を閉じる。

「……」

衝撃は来ない。ゆっくりと目を開けると、俺の前にはカルネラが立ち塞がり、その細い小さな片腕で明らかに強そうな男の拳を受け止めていた。

「契約……完了しました」

「……ちつ、運がよかつたな」

対峙する一人。カルネラに先ほどまでの弱弱しさは一切感じられず、真つ直ぐと男を見据えている。

「手は抜きません……三手で終わらせます」

そう……カルネラは男に宣言した。

## Take 3 contract

気がつけばじつと外の景色を眺めていた。ずっと暮らしてきた街とは明らかに違うその景色に、アーシュラはため息をつく。故郷を惜しむ気持ちなどありはしない。けれど自分にとつてこの町は居心地がいいものではなかつた。

「…姫？」

部屋に入つてきて、アーシュラに声をかけたのはシルアだつた。その声には振り向いたものの相変わらず何も言おうとはしない。

「どうか…しました？」

シルアはもう一度問い合わせる。そうしてやつとアーシュラは首を静かに振つた。

「なんでもない…少し、外を歩いてくる

「え！…あ…姫！？」

言つが早いかアーシュラはそのままシルアの横をすり抜けるように部屋を後にしようとする。当然のようにそれを止めるシルアの手をアーシュラは静かに遮つた。

「平気…近くを散歩するだけだから、すぐ帰るわ」

まっすぐとした目を向けられ、シルアは仕方なく頷く。もちろんアーシュラの心配をしない訳ではないが、それ以上に信頼しているだけの事。彼女がそう口にしたのならば、シルアはそれを信じるだけだつた。

目の前で繰り広げられていく光景に目を奪っていた。それは本当にこの世のものなのか…疑わずにはいられない。カルネラが男に宣言した後、戦闘は開始された。

男の武器はその拳だつた。弾丸のように振り下ろされるソレは、触

れるもの全てをまるで柔らかい泥の塊でも崩すように砕いていく。カルネラがさけた事でコンクリートに叩き付けられた拳は、それを粉碎していた。

「……つ」

声も出ない。出せるわけがない。俺にはどうすることも出来ない世界だった。コンクリートを碎いてしまう拳など、受け止めれば確実にその骨が碎かれるだろう。けれどそれをカルネラは片手で受け止めるのだ。それが彼女が人間ではない事を否が応でも表していた。幾度も振り下ろされる拳、カルネラはそれを確実に受け止めていく。カルネラは言つた。『三手で終わらせます』と、まだ彼女は一手目すら繰り出してはいない。図つているのだ……確実に、絶対の一手目を与えるタイミングを……

「……つ」

振り下ろされた拳をカルネラが左手で受け止める。それは一瞬一秒。右手に出来る限りの力を込め、カルネラが男のわき腹を抉る。

「一手！」

「……つあ」

反射的に身を引いた男は、そのままカルネラとの距離をとつた。確実に男を捕らえたと思ったカルネラの一手目は、男の左腕によつて寸前のところで防がれていた。しかしそれを見たカルネラに動搖の様子はない……まるで計算内だとでも言つよう、カルネラは男を見据えていた。まだ一手目なのだ……そう、カルネラには後一手が残されている。

「……」

無言のままカルネラが地面を蹴り男との間合いを詰める。数メートルはあつたその間合いを詰めるのに必要としたのは、たつた一歩だった。

「くつ！」

カルネラの両手が男をつかむ。が、それは当然の様に男の手によつてしつかりと捕らえられた。その瞬間、カルネラは地面を蹴り上げ

男の方に重心をおいて、自らの体を宙へと浮き上がらせる。

「……！」

男が気づいたときには遅く、勢いよく宙へ浮いたカルネラの体は、その反動を保つたまま男の胸へと足を振り下ろした。

「二手！」

「つぐ……」

普通の少女の攻撃ならば、男はビクともしなかつただろう。しかし男に一撃を与えたのは紛れもない悪魔なのだ。それを証明でもするかのように男は吹き飛ばされ、地面へとたたきつけられる。

「……これで最後です」

カルネラは言つた。『二手で終わらせます』と……

そうだった。彼らにとつてこの戦いは殺すか殺されるか……つまるところカルネラの言つ『終わり』とは『殺す』という事だった。今更……わかつていたはずなのに、二手目を振り下ろそうとするカルネラの手を、俺は止めたくなつた。もちろんそんな事はできるはずがない……それでも……

「待ちなさい」

その声は唐突に、沈黙を破るように現れた。金の髪をなびかせながら、カルネラとは対照的な白い衣装をまとつた少女。

「あんたは……」

その姿には見覚えがある。忘れるわけがない……その外見の幼さを感じさせない違和感……『D e i t y』に姿を見せた三人組の一人……その少女だった。

「まさか散歩をしていて、こんな状況に出てくるとは思わなかつた……」

倒れた使徒と俺達を見比べながら少女は小さくため息をつく。いまだに緊張を解かないカルネラを氣にも留めず、少女は背を向け男へと歩み寄つていく。

「……助けるつもりなら……」

その少女の足を止めるよつにカルネラが発した言葉。それによつて

確かに少女は足を止めた。

「助けるつもりなら…なんだといつの？」

振り返ったその少女の顔には、恐怖すら覚える冷たさがあった。まるで、何事も受け付けないようなその空気にカルネラは言葉を失う。「契約者を見つけたからといって…どうにかなると思つていてるなら浅はかだわ…、私をあまり怒らせないで…」

静かな声。けれどそれには確かに殺意がこもっていた。しばらく反応がないことを確かめた後、少女は男のそばまで行き、その体を小さな肩に担ぐ。

「……」

固まつたように動かない体を俺はどうにかその場に止めていた。少しでも気を抜いたならば、その場に倒れこんでしまいそうだった。

「今度あつた時は…必ずあなたたちを排除する…覚えておいて…」それだけ言葉を残し少女は男を担いだまま、闇の中へと消えていった。

その姿が完全に見えなくなつて、ようやく俺は息をついた。カルネラもどうやら同じじりしへ、倒れこむようにその場に座り込んだ俺の前にひざをつく。

「大丈夫？」

そう問い合わせる声は先ほどと打つて変わって自信のない、頼りなげなものだった。そのギャップに驚きながらも俺はどうにか笑みを返す。

「…そんなに心配する事ない、戦つたのは俺じゃなくてお前なんだし…」

「違うの…私は…」

言いかけてカルネラは言葉を切る。もちろん俺にはカルネラの言いたいことなど分からない。だからその言葉を待つしかなかつた。

「完全に契約を交わしてしまつた。だから私にとつての契約者とは何なのか…それによつてあなたが負う苦しみを教えます」

まつすぐとした目。それに一転の曇りもなく、偽りなど微塵も感じられなかつた。そう、これからカルネラが言つことは、紛れもない事実なのだ。それがたとえ死の宣告でも……

自分の一回りは大きいであろうその体を、アーシュラは肩から事も無げに下ろす。

誰もいらない学校の屋上。カルネラたちから背を向けたどり着いたのはそこだつた。ただの夜の散歩のつもりだつたのだが、不意に感じたカルネラの気配に、向かわすにはいられなくなりあの場所へと足を向けていた。

「……」

じつといまだ目を覚まさない男、フェルデナントを見下ろしながらアーシュラは考えてみる。アーシュラは一人の供を連れ、カルネラを追つてきた。カルネラを狙つていたということを考えると、フェルデナントも教会の使徒のはず、けれどアーシュラ自身使徒全員を覚えているわけではなく、フェルデナントを見るのもこれが初めてだつた。

「話を……聞かないと」

見知らぬ使徒がいることに何の疑問もない。アーシュラが疑問に思つたのは『カルネラを追つていた』という点だつた。自分自身でカルネラを始末すると決めたときから、他の使徒へカルネラを追う様にという任は与えていない。だからこそ、その正体を確かめねばならなかつた。

「……う」

「目が覚めた?」

目覚めたフェルデナントの目に映つたのは、月の光とこの町には不釣合いなアーシュラの姿。あまりの違和感に自分がいまだ夢の中……

あるいは死んだのかと思つてしまつ。

「呆けてないで答えなさい」

そんな考えを打ち消すようにかけられた厳しい声。その声でやつと自分自身がいまだこの世界にとどまつてゐることを確かめることができた。

「あ、ああ……口は覚めた」

「そう……それならば問うわ、貴方は何者でなぜカルネラを追つているの？」

質問は簡潔だつた。無駄な時間など割きたくないとでも言つようとして、元より口にする。

「何者つて……それはこっちの台詞だ。あんたこそ何者だ？」まつすぐと田を向けるアーシュラに、にらみ返すよつた田を向けるフェルデナント。

「何者……貴方は……使徒ではないの？」

自分の耳を疑うよつな声でアーシュラは問い返す。

「使徒だつて？何だよそれ……悪いが俺はそんなんじやねえよ」はつきりと答えられた言葉。それを聞いたアーシュラは考え込むように黙り込んでしまつた。

目の前の男は『使徒』ではないと言つのだ。それがどういうことを指すのか、アーシュラに分からぬはずはない。教会の人間ではない者が悪魔を追つてゐる。それは何かの因縁か、それとも恨みか……それだけなら十分にありえる事なのだ、今更驚きはしない。けれど……フェルデナントはカルネラの攻撃を受けて、なお生きてゐる。それは普通の人間では考えられないことだつた。

「……そう、では自己紹介をしておくわ。私の名はアーシュラ……訳あってカルネラを追つています」

アーシュラは自身が教会の人間であることも、その地位すらも口にはしなかつた。

「へえ……俺はフェルデナント……まあこちらも訳ありでな……」

フェルデナントも自分のことについて深くは触れようとしなかつた。

本当に名前だけを交わす自己紹介。

「貴方もカルネラを追っている……だから一つ提案するわ…」

「…？」

フェルデナントの正体が分からぬ今、アーシュラにとつてそれを見過ごすわけにはいかなかつた。

「私と協力しない？ カルネラを排除するまでの間……」

だからそう口にした。予想もしなかつた言葉にフェルデナントは耳を疑うが、まつすぐと向けられたその目に頷く。

互いの名しか知らぬ二人の間でその日、同盟は結ばれた。

カルネラが話を終える頃には、もう辺りは白み始めていた。

カルネラの話は至つて簡単なもの、このまま契約を続けていれば俺は確実に死ぬということ。カルネラにとつての契約者は盾のようなもので、カルネラが負うはずのダメージを受け取ることになる。それは即ち、カルネラが死ねば、俺も死ぬということをさしていた。

「……」

言葉は出ない。例えカルネラが死に至るような傷を負わずとも、俺の体が耐え切れるであろうダメージを上回れば死ぬことになる。

カルネラとの契約を破棄する以外に、生きる道はないという話。

「……私は、今まで一人で戦つてきました。契約を破棄するのであれば構いません…」

はつきりとそう告げるカルネラは、どこからどう見ても普通の少女で、そんな少女が今まで一人で戦つてきたなんて信じられなかつた。けれど、それを俺は信じざるえない状況を目にしてしまつていてる。

「貴方を…巻き込むわけにはいきません」

男の拳を受け止めたカルネラの手は、確かに小さく細い少女の手。自分の身より、俺の身を心配するような少女。

「…俺は」

そんな少女を見捨てることなんて出来なかつた。今はただ死ぬという事が実感できていないだけかもしれない。そうだとしても、今俺が出せる答えはそれしかなかつた。

「俺は契約を破棄したりしない」

「…でも、それでは…」

物言いたげに顔を上げたカルネラに、俺は笑みを返す。出来る限りカルネラが気兼ねしないように、重荷にならないように。

「もう、決めたんだ… カルネラの手を取つたときから」

そう、立ち上がって手を差し出した。一瞬だけ目を見開いて躊躇するが、やがて恐る恐る俺の手に触れる。

「契約者が盾だつて言うなら、それでも構わない… カルネラが俺の剣になつてくれ」

俺には戦う力はない。だつたら盾になるぐらい… 耐えてみせる。目の前の少女が… 戦うというのだから…

「…はい、ごめんなさい… ごめん、なさい」

泣きそうな声で、顔を伏せるカルネラ。それは多分これから俺が負うであろう痛みを思つてのことだろう。それは同時に、それほどまでに辛いであろうという事を感じさせた。

「ああ…」

大丈夫だと、そういうかけて言葉は出でてはこなかつた。

部屋に戻つてきたアーシェラの隣には、フェルデナントの姿がある。もちろんヴィグルもシルアも真つ先にその事をアーシェラへと問い合わせた。けれどアーシェラは別段変わつた様子もなく、平然と「協力することになつた」とだけ伝える。

「…姫…教会の人間でもない人に手伝わせるんですか?」

フェルデナントが席をはずし、三人になつた時を見計らつたように

シルアが口にした。

「…確かに彼は教会の人間では無いと言っている……けれどカルネラを狙っている以上、放っては置けない」

無論その言葉にはシルアもヴィグルも同感だった。カルネラが契約者を得た今、これ以上猶予といえる時間はないのだから…

「じゃあ姫さん…とりあえずあいつは仲間として対応するんだな?」

「……そんな事は言つていないわ」

冷たい返事だった。はつきりとした口調と目線でアーシュラは言葉を続ける。

「彼は私達と偶然目的が一致しているだけ…別に彼を支援する必要も助ける義務もない…」

「もし彼が死に瀕しても捨て置く…という事ですか?」

続けて問いかけたシルアの言葉も冷たいものだった。当然のよう頷いたアーシュラにシルアとヴィグルは安心したように息をつく。正直な事を言うと、身元も正確につかめない男を仲間にするのは御免被りたかった。

「わかりました…従います」

そう笑みをこぼしたシルアはいつもの柔らかな雰囲気をまとつている。いつでも二人にとつてアーシュラの言葉は絶対だった。

カルネラは最後まで「D e i t y」に足を進めるのをためらつていった。自分自身ここに足を踏み入れてしまつたら、これからは何があつても恐れている事態が回避できないと思つたからだ。

「…カルネラ?」

その名を呼ぶ京右の声が耳に触れる。甘えてもいいなら甘えてしまいたい。今もこの先もずっと一人で耐え抜いていくのもう嫌だつた。自分自身の事すらまだ正確に思い出せはしないけれど…少なくとも今カルネラ自身が意識しているのは「普通の人」としての自

分だつたのだから…

「…でも私は悪魔なんです」

誰に言われたわけでも、教えられたわけでもない。それでも自分が人とは…目の前にいる京右とは明らかに違う存在だということはわかつていた。あえて言葉にするなら、それは自分の中にある本能が教えてくれるのだろう。

「…死ぬかも…しれないんですよ」

俯いたままカルネラは口にする。

「後戻りできないんですよ…死んだら、何もできなくなるんですよ」声は小さく低い。けれど物音ひとつしない夜が明けたばかりの街では、その声ははつきりと耳に届いた。

「…カルネラ、俺は」

「死ぬのが怖くはないんですか！？」

京右の言葉を遮るようにカルネラが声を上げる。京右に向けられた顔は眉が顰められ、目には涙が溜まっていた。本当は頼りたい。本当はその傍に誰かいて欲しい。けれど…そんな事をすればその相手が死ぬのは分かつていた。相手が死ぬことが怖いのではないのかもしない…相手を失つた後、自分が背負うであろう孤独が怖いのかかもしれない。

「怖くないわけじゃない…たぶん分からんんだ…」

嘘を並べることもできず、京右は正直にそう口にする。

「…分からない？」

鸚鵡返しに聞いたカルネラに、一瞬言葉を濁すが、はつきりと言葉を続けた。

「今まで平和に暮らしてきて…戦争とか殺人とか、話は聞くけどそれだけで…その実感がないんだ」

生まれたときにはもう平和で、運のいい事に今まで命に関わるような大事はなかつた。特に死にたいとも思つたことがなかつた京右にとって、その「死ぬ」という事自体が実感としてなかつた。

「…だつたら」

小さく呴くとほぼ同時だった。

カルネラに視線を戻した京右の顔…そのまま横をカルネラの拳が掠める。息が止まるかと思った。普通の自分より小さな少女にされたとしても、驚くであろうそれをしたのは、カルネラなのだ。もちろんその拳を真に受ければ京右は生きてはいないう。

「カル…ネ、ラ」

名を呼ぶのが精一杯だった。目の前の少女…先程まで泣きそうな顔を向けていた、折れてしまいそうな少女が…今は殺氣を帯びている。何の訓練もしていない、平和ボケした頭でも分かるぐらいぴりぴりとした殺氣。

「…怖い…ですよね」

呴いた声。

「動けないぐら…怖いですよね…死ぬのは、嫌ですよね」

最後の最後…呴いた言葉は、苦笑いを帯びた優しい声だった。何か声をかけようと京右が口を開きかけた瞬間、カルネラが一步、二歩後ずさる。

「…あ」

声が、言葉が出なかつた。目の前で顔を伏せ、立ち尽くしている少女に何か言わなければと思つほど、言葉が出てこない。

「「めんなさい…」…ありがとう」

一度だけ頭をさげ、カルネラは小さく微笑んだ。それはどうみても自分より幼い少女で、頼りない姿だった。

「…私悪魔ですから…役に立たない人は必要ないです」

はつきりと聞こえる声でカルネラが背を向ける。勿論そんな言葉が本心でないことがぐらい分かつていて。分かつていても何も言葉が浮かばないのだ。

「さよなら…キヨウスケさん」

言つが早いが、小さな背中は走り出す。

追うべきなのか…追わないほうがいいのか…自問自答を繰り返して分かるはずなんてなかつた。例えカルネラが本心で言つていなかつ

たとしても、「役に立たない」その言葉は酷く耳に残った。追いかけて、カルネラを説得して……けれどそれでどうなる……何もできない自分にカルネラを助ける事なんてできるわけがない。

「……俺は……」

言葉が続かなかつた。握つたはずのその手を離してしまつた。

夜が明けた。朝が来ても俺は「D e i t y」で菜月さんやフィルネスさんと顔を合わせていた。

「……あの子が自分で決めたなら仕方ないでしょ……忘れないさい坊や」  
フィルネスさんは当然のようにそう口にして奥の部屋へと入つてしまつ。多分昨夜寝ていなかつて、今から寝るのだらう。

「京右」

菜月さんに名を呼ばれ、俺は顔を上げた。田に入つたのはいつも通りの菜月さんの顔。俺は今どんな顔をしているのだらう……カルネラの手を離し……その後を追えなかつた。

「お前が気に病むことはない……誰だつて死ぬのは怖い、そんなもんだろ」

一瞬、菜月さんもそうだつたのだろうかと思つ。フィルネスさんと一緒にいるという事は、あの教会とか呼ばれる人間達とも対立しているといふことで、それはあんな光景が日常という事をあらわしている気がした。

「……でも、あいつ」

思い出す。初めて会つた時の事を……弱弱しくて、控えめで、少女らしい笑顔を漏らしたカルネラ。

「助けて……つて言つたんだ」

助けてと……誰でもない俺に手をさし伸ばしてきた。俺は当然のよう<sup>う</sup>にその手を掴んだ。冷たくて小さくて……消えるんじゃないかと思うような手だつた。

「…お前は…人として善行をしただけだ。これ以上は善行だけじゃすまない…忘れたほうがいい」

フィルネスさんと同じ言葉を言つ。死にそうだつた人を助けた。確かに俺はそれだけのつもりだった。けれど本当はそうじゃなくて、色々な事にまきこまれて、色々な話をきいて…それでも…俺はその手をまた掴んだんだ。

「…わかりました」

けれど口をついて出た言葉はそんなものだつた。俺に何ができる…俺は普通の人間で、目立つた特技も無くて…何も…してやれないのだから。

スッと…暗かつた視界が開けて見たことも無い場所が眼前に広がつた。あたりを見渡すと懐かしいようなどこか不思議な気持ちになつていく。けれどやつぱりそこは見たことも無い場所で、そこにいる実感がないという所で、やつとそれが夢なんだと認識できた。夢の中でこれは夢なんだと理解するのは不思議な感じがしたが、何故か意識はハツキリしている。

「カルネラー！」

聞き覚えのあるその名前に、俺は慌てて声のほうへと振り返つた。そこにいたのは多分年よりも若く見えるであろう初老の女性と、幼い数人の少女と少年…。その中の一人…見覚えのある少女がいた。灰色の髪を一つに束ねた俺の知つている姿より小さなその姿。

「もう、あんまり遠くに行つちゃ駄目だつて言つたろ?」

優しく怒るようにカルネラの頭を小突く。一方カルネラは反省したようなしていないうやな笑みを漏らす。

「あのね先生、あつちで男の人見かけたよ

「男の人?」

興味津々とばかりにカルネラが先生と呼ばれた女性のスカートの裾

を引っ張る。

「うん、十字架もつてたの」

その言葉に明らかに女性の表情が硬くなつた。今ならなんとなく分かる。その男は…教会の人間なのだろう。

「…そり、ほら階」飯にするから家の中に入りなさい」

小さく微笑むと、女性は子供たちを家の中へと押しやつた。けれど女性だけは家の中に戻ろうとはしない。くるりと踵を返し、カルネラが指差していた方向へと足を速めた。

そうして女性が暫く歩いた先…男はいた。黒い神父服をまとつている。男も女性に気がついたのか、冷たい目を向けた。

「…教会が、何の用？」

先に女性がそう声を上げた。大きくは無いが、その声には小さな殺気が入り混じつている。

「ご挨拶だな……お前も元使徒だらう」

「…あたしは使徒になんてなつた覚えない……あたしは、師匠からハンターになる事を学んだんだ」

はつきりとした口調で女性ははき捨てるように言った。男は動じた様子も無く、肩をすくめる。

「まあどちらにせよ、教会の人間であつた事には変わりない」

「…だから何だつて言うの」

女性はいつしか男を睨んでいた。その言葉に男はピクリと眉を動かし、女性に目を向ける。

「何…？本気で言つてはいるのか…？それとももう三十年以上も前のことなど時効になつてはいるとも？」

その言葉に女性は息を飲んだ。思い当たる節があるかのように、拳を握り締めている。

「お前は教会の人間でありながら、フィルネスと松島夏樹…二人を見逃しただろ？…重罪だ…聖女がお怒りになられたよ、お前を殺せとね」

聞き覚えのある名前に戸惑いながらも、俺は男と女性の会話から目が話せないでいた。殺す…ただ教会が悪とするものを見逃しただけで殺すというのか？

「…そう、殺すなら殺しなさい…もう十分…生きたわ」

女性の顔には笑みが浮かんでいた。これから死ぬというのに、理不尽な理由で殺されるというのに…

「あたしを殺して…さつさと消えて…あの子達は教会とは何のかかわりも無いでしょう」

「孤児院か…自分が孤児だったからか？」

馬鹿にしたような笑みを浮かべる男に女性は答えない。

「まあいいさ、じゃあ死ぬんだな…Amen」

男は懐から銃を取り出し、何のためらいも無く女性に向ける。逃げることも、叫ぶことも無く女性は目を閉じた。

「せんせえ…！」

その声と銃声はほぼ同時だつただろつか…声のほうに目を向けると、泣き出してしまったカルネラの姿があった。女性もその姿に気がつき、泣きそうな表情を浮かべる。けれどそれだけ…胸を貫いた銃弾により、女性は崩れるように地面に倒れた。

「せんせえ！せんせえ…！」

カルネラがバランスを崩しながらも、女性の傍まで駆け寄る。けれどたどり着いた時には女性はもう息をしていなかつた。

「…残念だな嬢ちゃん」

男が感情の無い声でそう口にした。ゆっくりと男を見上げるカルネラ、その目には怒りの感情が滲んでいる。

「さつさと帰るんだな…じゃないとお前も死ぬぞ？」

怒りを通り越し悲しみになつたのか、カルネラのめからは大粒の涙がこぼれ始めていた。奥歯をかみ締め、男を睨みつける。そんな事をしてどうなる訳でもない事は分かつていた。それでも…

「うあああああ…！」

カルネラは男に飛び掛る。当然子供の力…大人にそれも男にかなう

はずもなく、カルネラは男によつて地面へと叩きつけられた。

「…」

「たつぐ、めんどくせえな…」

男はそう一やりと口を歪ませた。まるで面白い玩具を見つけたかのよつな顔で…男はそのままカルネラを抱き上げて歩いていく。カルネラの意識は昏倒しているらしく、たいした抵抗もしていない。ただその目は、ずっと女性の姿を見ていた。

目が覚めると同時に涙が流れていった。

誰に聞かなくつても分かる。あれはきっとカルネラの過去なのだ…カルネラ自身忘れてしまつてゐる過去…契約はまだきれていない。だからこんな夢をみたのだろう。

体が重い…頭が痛い…吐き気がする…全身に痛みが走る。息をすることさえ苦痛…これがカルネラの言つていていた契約の代価。けれどそんな体の痛みより…その手を離してしまつた…カルネラが今も感じてゐるであろう悲しみが俺の中に伝わつてくる。それが何より辛くて…苦しくて…涙が出た。

その手を…離すんじゃなかつた、と…

「なあ 嬢ちゃん、お前どこにも出かけないんだな」

そうアーシュラに声をかけてきたのはフェルデナントだつた。今その場にはアーシュラとフェルデナントの二人だけ、シルアとヴィグルは朝からカルネラの居場所を探る為、出かけている。

「…その嬢ちゃんというのはやめて」

確かに外見だけを見て取ればその言い方に、間違いはないのだろうが、アーシュラとしてはその物言いは許しがたいものだつた。けれどそんな忠告を無視するようにフェルデナントは肩を竦めるばかり。

「お前いくつだよ…」

その問いに答えなかつたのはアーシュラ。聞き流すように顔をフェルデナントから背けた。

「勘違いしないで…私は貴方と協力関係にあるだけ…それ以上でも以下でもないわ」

顔は外に向けたまま、冷たい声でそう口にする。当然のようにフェルデナントも薄い笑みをこぼした。二人の間に「信頼関係」などといつものは初めからありはしない。互いを利用するだけ…それは当然理解していた。

「嬢ちゃんはどうしてカルネラをそうままでして狙う」

「……」

嬢ちゃんという呼び方を変えるつもりはないらしいフェルデナントに、アーシュラは静かに視線を送る。もちろんそんな事を再度指摘するためではない。

「貴方に話す必要はないわ」

ただ一言、それで会話は打ち切られるかのように思えた。けれどフェルデナントは椅子に腰掛けたまま、口を開く。

「教会……神の代行者として仇なすものを狩る使徒の集まり」

「…」

厳しい視線を送るアーシュラにフェルデナントは一ヶと笑みを返した。

「ビンゴ…初めて会った時に使徒かと聞かれたからな…まさかとは思つてたんだが…、こんなお嬢ちゃんだとは思わなかつた」

「貴方…」

先程と打つて変わつたように表情と空氣が厳しくなるアーシュラ。当然それを分かつているフェルデナントの方は先程と全く変わつた様子もなく、椅子に腰掛けたままだつた。

「別にやりあうつもりはない…今の俺だと嬢ちゃん一人にやられちまつ」

ふざけているのか否か、フェルデナントは両手を広げてけらけら笑う。

「…今の？」

「聞き流して貰えなかつたか」

互いに声を荒げる様な事は一切しない。けれどその間に流れる空気は冷たいものだつた。ボロをだせば次の瞬間に首を刎ねられていそうな雰囲気。

「…俺もあんた達と同じようなものだ…ただ訳あつて今は力の半分も使うことが出来ないんだよ」

さらりとそう口にしたフェルデナントに詰め寄るよつなことはしなかつた。例え詰め寄つたところで口を割ることはしないだろう。

「まあいいわ…覚えておきなさい…貴方を殺すことなど簡単な事よ」

「上等」

会話はそれで終わりを告げる。アーシュラとしては分が悪い方向で…相手の身元もしだれぬまま、こちらの身元が割れてしまつた。アーシュラは決してそれを表に出さないが、奥歯をぐつとかみ締める。一層フェルデナントに対する警戒心を強めたまま……。

目が覚めた頃にはもう田舎は昇りきっていた。少しだけ小腹が空いていた。それもそのはずだった、時計をみると時刻はもう昼過ぎ……どうやらあの後ずっと眠ってしまったことを俺はやっと思い出した。

自宅に帰らず「D e i t y」にて朝を迎えることになつたのだが、ずっとこうしているわけにもいかない。俺の本職は学生であり、このまま無断欠席が続いたならば確実に両親の元へと連絡がいくだろう。

「あら、おやみう

部屋を出て店のカウンターまでくると、フィルネスさんが笑顔で出迎えてくれる。けれどその傍のどこにも菜月さんの姿はなかつた。

「菜月さんは……？」

「ああ……朝から出かけたわよ、坊やのお陰で私達がここにいる」とがばれちゃつたからね

皮肉をこめた言い方をされるが、そのとおりなので返す返事もない。それを分かつているのかフィルネスさんはそれ以上言葉を続けることはない。

「……怒つて……ますか？」

ただ黙つている沈黙がつらくて、ついやう口に出してしまつた。一瞬だけ驚いたような顔を向けたフィルネスさんだが、すぐに笑顔に戻り首を振る。

「まさか……私達はずっとこんな生活を続けてきたのよ、今更……そんなつまらない事で怒つたりしないわよ」

「…………すつと」

その言葉にどうしてもカルネラを思い出してしまい、俺は視線を落としてしまう。

「……そう、ずっとよ……坊やが生まれるずっと前から……それでもよかつたわ……私には夏樹がいたもの」

そう言つてフィルネスさんが浮かべた笑みは、優しいものだった。

ずっとそうして生きてきた…けれどその傍にはいつでも菜月さんがいて…だから平気だと、声がそう言つていた。

「夏樹は私のために全てを捨ててくれた…人としての生も、友人も家族でさえも…、だから私は夏樹がいればいい…ほかはどうだつていいのよ」

俯いたままの俺に、その声ははつきりと届く。カルネラにそんな人はいたのだろうか…ただ一度でも…全てを捨てて味方になってくれた人は…

「契約…まだ切れてないみたいね」

「え?」

その言葉に顔を上げると、笑みの消えた真剣な表情と目が合つた。坊やは決めたんでしょう、関わらないと…だつたら早く契約が切れないと…困るわね」

契約が切れない限り教会は俺を敵として判断するだろう。いや、もしかしたらもう敵として判断されているのかもしれない。ただ一度でさえ…彼らにとつてその行いは罪なのだから…

「でも駄目ね…もう完全に契約しちゃつたみたいだし…その契約が切れるとき…それはあの子が死んだ時よ」

息が止まるかと思った。予想していなかつたわけではない。初めからフィルネスさんはそう口にしていた。カルネラが死ねば契約は切れる…けれど今、初めてそれを実感した気がした。

「でも恐らく…すぐよ…すぐに切れるわ」

フィルネスさんはどこまで分かつているのだろうか、カルネラを探しに行つた夜…出会つた一人の少女。明らかに何かが違うあの少女に追い詰められるようなことになれば…カルネラは確実に…

「……」

言葉が出ない。俺は正義の味方でもなんでも無い普通の高校生で…命を懸けてまで、全てを捨ててまで…カルネラを救うなんてそんな踏ん切りがつかない。きっと怖いんだ…命を懸けることよりも…今ある全てを失うことが。

それが分かっているから、きっとカルネラは俺に言ったんだ… その手を離したんだ。

「暫くよ…後暫くすれば…すぐに全部忘れられるわ」  
小さくそう口にしたフィルネスさんの言葉に、俺は何も言葉を続けられなかつた。

つけられている… そう感じたのはつい先程だつた。恐らくは教会の人間だらう。菜月は小さくため息をつく。予想はしていた事だつたが、まさかこんな白昼堂々つけられるとは思いもしなかつた。カルネラを追つてきた教会の人間だが、フィルネスがいる事を知つた上でそれを野放しにするとは思えなかつたが、その通り。あわよくば菜月とフィルネスも始末するつもりなのだろう。

「……」

見ずとも分かる。相手は一人。たいしたこと無い、たかが使徒だ。聖乙女が相手だというならばまだしも、普通の使徒相手に遅れをとるようなことは無い。そんな事よりも問題は場所なのだ。公道、それも人通りが多いショッピング街。こんな場所で騒ぎを起こすのは御免被りたかつた。相手もそんな馬鹿をするとは思えなかつたが、早々にこの場を立ち去るのが上策だらう。

思うが早いか、菜月は人目を避けるように人通りの少ない方向へと足を速めた。無論二つの足音も急ぎ足でついてくる。相手とて隠れているわけではないらしい。

暫く歩いて離れた場所。昼だというのにもう殆ど人の姿は見受けられなかつた。そこで足を止め振り返る。

「…何の用だ？」

声を掛けると姿を現したのは、シルアとヴィグルだつた。

「フィルネスと行動を共にしているヴァンパイア… 間違いありませんね？」

シルアの問いかけに、菜月は肩をすくめた。分かっていて問い合わせるその神経が疑わしいとでも言わんばかりに。

「だとしたら？俺を殺せるか？」

「純血でも無いくせに……一対一でよくそんな台詞を吐けますね」  
冷めた口調でそう言葉にするシルアには微塵の優しさも感じられない。それはヴィグルも同じだった。使徒として生きてきた彼らにとって悪に与える情など初めからない。

「純潔じゃない……か、まさかお前等、俺がフィルネスに従うだけのヴァンパイアだとでも思っているのか？」

「……どういう意味ですか？」

菜月が薄く笑みを浮かべる。馬鹿にしたようなその笑いにシルアはいい気分はない。ただそれよりもその言葉の真意がきになつていた。「従うだけのヴァンパイア」と自分の意思で行動する「従うものではないヴァンパイア」では大きな違いがある。

「俺はフィルネスに血を吸われ吸血鬼になつた……確かにそのままじゃあフィルネスに従う者だ。純潔じゃない俺達が「本物」になる方法を知つているか？」

菜月がかけていた眼鏡を外す。裸眼になつたその目は赤く染まつていた。否、元よりそれは赤かつたのだ。おそらくは菜月の身に着けていた眼鏡によつてそれが抑えられていただけのこと。

「まさか貴方は……」

嫌な予感なんてものじやなかつた。それはもうすでに確信。間違いなくシルア達が目の前で対峙しているのは本物のヴァンパイア。

「主である者の血を飲む事……それで俺達は従う者ではなくなる」

「……っ」

元々人間だった人物にそんな事が出来るわけは無いと思っていた。そんな事は主であるフィルネスがさせる訳はない……そう、それは彼等のプライドにとつて大きな意味を示す。

思い違いをしていた。

この男とフィルネスは元より「主」と「従者」ではなかつた。

「俺はフィルネスほど甘くは無いぞ…」

間違いない、その目から見て取れたのは殺意だった。

朝方から出かけたというのに、その姿はまだ帰つてくる気配すらなかつた。アーシェラがそれを気にし始めたのは一時間ほど前。いつもならばもう帰つてきている時間だろう。何かあつた…そう考えるのが当然だつた。

「帰つてこねえな…あの二人」

「 つ！？」

急に背後から声を掛けられアーシェラは驚いて振り向く。そこには当然のようにつェルデナントが椅子に腰掛けていた。

「急に声を掛けないで……」

肩をすくめただけのフェルデナントにアーシュラはきつい眼差しを向ける。けれどそれもすぐ別の方向へと向けられた。考えられる状況は一つ。カルネラと接触しその始末に手間取つていて。そしてもう一つ…フィルネスか従う者と接触し、帰還が困難な状況にある。どちらにしても放つておける様な状況ではなかつた。

「…一人を探しにいくわ」

さつとその場を後にしようとするアーシュラに、慌ててついていくフェルデナント。

「何？」

「カルネラと接触した場合、俺にも用があるんでな…」

キッときつい眼差しを向けられるが、当然のようにつェルデナントは答えた。納得したのかしていないのか、それ以上アーシュラが止める事はしない。そうして一人は揃つて部屋を後にした。

当てもなく探し回るのははつきり言つて頭がいいとはいえないが、それ以外に方法が無いのも確かだつた。

「嬢ちゃん、何か電波とかねえのかよ」

「あるわけ無いでしょ、そんな便利なもの！」

あれば使うのかと、内心思つてしまつたフェルデナントだが言葉には出さない。十中八九アーシュラならば使うといつだらう事が見て取れたからだ。他人からどう見られるかなど蚊ぼどもさにしていない。

「だからって当てもなく探すのか？」

「…何かいい案もあると言うの？」

疑問に疑問で返され、フェルデナントは言葉を失う。虱潰しに当たるほかないのは互いに理解していた。アーシュラとフェルデナント、全く違う性格に意義、けれど互いに思うところは同じ事が多い。

「オーケー、虱潰しにいこう」

返事もそこそこにアーシュラは再び早足に歩き出した。仕方がないとフェルデナントも黙つてその後を歩く。

こう言つのもなんなのだが、二人の容姿はかなり目立つ。どう見てもそれは外国人のもの…それだけなら構わないのだ。問題は一人が酷く不釣合いなこと。一方は高校生かそれ以上に見える青年。もう一方はどう見ても年場もいかぬ少女。そしてその二人は似たところも無く間違つても兄妹には見えなかつた。

「居心地悪くねえか」

「何が…？」

当然のように視線を感じるフェルデナントが問いかけるが、アーシュラの方には全く気にしていない。その通り気にしていないのだから仕方が無いのだが。

「鉄の乙女だな…」

ポツリと呟いた言葉はアーシュラの耳には入らなかつたらしい。幾度そう思つただろが、アーシュラは感情を表に出さないというよりは自分を出さない。フェルデナントにはそう見て取れた。それは絶対に崩れることの無い防壁にも見えて、ガラス細工の様に脆くも見える。その危うさこそがアーシュラの人を引き付ける魅力なのだ

ろうと思つ。

「…いた」

独り言の様にそう言葉にしたのはアーシュラ。一瞬にして意識を切り替えたフェルデナントもアーシュラが見つめる方向へと視線を送る。互いにかける言葉など無く、どちらとも無く駆け出す。人通りが見るからに少くなつていく細い道を駆け抜ける。それはただの少女のものではなかつた。そうして思い知る、アーシュラが使徒としてずば抜けている事を…

突き当たりの角を曲がる そうして辿り着いた。

「

血の臭いになど慣れた。その赤い色も見覚えがある。だから焦つたりなどはしない。だから息を飲んだりはしない。だから恐怖を覚えたりなどしない。

「…ヴァン…パイア」

そつ言葉にする。それで幾分か自分を取り戻せたような気がした。血の赤が目の中まで染め上げる。地面に伏す顔には見覚えがある。シルアとヴィグル…アーシュラと共にこの街へとやってきた使徒。その体は赤く染まり、ピクリとも動かない。そんな中立ち尽くす男の姿。

「…使徒か」

その手は赤く染まつてゐる。武器などもつてゐるはずもない、そう二人の使徒は武器も持たぬ丸腰の一人の男にやられたのだ。それは目の前の者がヴァンパイアだから…「従う者」などと呼べようはずもない。

「神に仇なす者は…何者であらうと排除します」

言い聞かせるように呴いた言葉。それは鎖であり盾であり剣。菜月にかけ様としたアーシュラを止めたのは、フェルデナントだつた。

「馬鹿言つてんじゃねえ、分が悪いのは火を見るより明らかだろうがつ…？」

フェルデナントの言葉は理解できた。それでもそれに背を向けることはアーシュラにとって許しがたい事実。

「逃げたいのならば、一人で逃げなさい」

はき捨てるように言い切ったアーシュラに、フェルデナントは頭を抱えそうになる。優劣の区別がつないほど馬鹿ではない。これはアーシュラにとっての存在意義にかかるのだ。それは分かる。分かるが理解は出来ない。自分の為に、自分の為だけに生きてきたフェルデナントには理解できるわけも無かった。

「くつそ、わかんねえ嬢ちゃんだなつ！！」

仕方なくフェルデナントもアーシュラと同じように菜月に向き合つ。一瞬だけ、アーシュラが目を疑つたような表情を浮かべた。

「分が悪いと… そう言つたわね」

アーシュラがハッキリと、この場にいる誰もが聞き取れる声で言つ。

「たかがヴァンパイア一人… 私一人でも排除できるわ」

手を掲げる。静かに風が舞う。その手に握られていたのは、一振りの剣。

「お前は」

菜月が声を漏らす。白い法衣、金の髪、青い瞳、一振りの聖剣…

「聖乙女」

「A m e n」

言葉とほぼ同時にアーシュラは剣を振りかざして飛躍する。気がついた様に菜月は後退するが、振り下ろされた剣は更に空を切り、菜月に向かつて襲い掛かる。少女の姿に不釣合いな大きさの剣。いや、少女が小さいせいでそう見えるだけかもしれない。

「…これは、俺が不利か」

呴くようなその声と共に、菜月はその場から高く飛躍する。はるか上空、人であるアーシュラに追うことは不可能、そう思われた。けれどその姿を追うように、アーシュラも飛躍する。

「逃げると思わないことね」

振り下ろされる剣。紙一重でそれを避けた菜月は地面へと舞い降り、

一度だけ舌打ちをしてフェルデナントの隣をすり抜けた。そしてそのまま公道の方へと走り去つていく。当然のようにその後を追うアーシュラをどうにか止めたのはフェルデナントだった。

「放して！」

「馬鹿言つな！むこには公道だぞつ、捕まりたいのか！？」

酷い剣幕でそう怒鳴りつけられ、アーシュラはやつと我に返る。それと同時に、手に握られていた剣はすつと姿を消していた。

「この二人…まだ息があるみたいだぜ…」

そういうつてフェルデナントが指差したのはシルアとヴィグル。使徒と言えど、あまりに深い傷を負い、血を流しすぎると死に至る。今は一人の手当てをするのが先決。それはアーシュラにも理解できていた。

「…一人の手当てを…するわ」

小さく呟かれた言葉に、フェルデナントはやつとの思いで息をついた。

二人の傷は浅いとは言えるものではなかつた。それでも命を取り留めただけでよしとするほか無い。一人を手当てし終え、アーシュラは黙つて外の景色に目を向ける。自分は何をしているのかと、この街に来てからずっとと思うような行動が取れていない。それは酷くいだたしく、同時に焦りを生んだ。

「寝ないのか、嬢ちゃん？」

その声にアーシュラは静かに振り返る。そこにはもづ見慣れたフェルデナントの姿があつた。

「貴方こそ…寝ないの？」

「別に、俺は大して力も使ってねえし…嬢ちゃんは疲れただろ」

それがさも当然の事のように口にするフェルデナントに、アーシュラは言葉を失う。アーシュラの聖乙女としての力。それは確かに人

の体を持つ彼女にとつて酷くつらいものだった。けれどそれを口にした覚えは無い。

「どうして…？」

だから問い合わせてしまう。その意図を確かめてしまう。

「…別に理由なんてねえけど、なんとなくだ。高い能力にはそれなりのリスクがつきもの…何のリスクも無くそんな力を使いたい放題ならカルネラなんて話にならないはずだからな」

何も考えていないようで、見るところ、聞くところは聞いているらしい事に、少なからず感心してしまう。フェルデナントの言うとおり、アーシュラの力は自由に使えるわけではなかった。その力の強さに伴うように、それはアーシュラの力を体から奪っていく。だからアーシュラは普段、その力を自分自身をタンクの様にして蓄積している。いわばアーシュラの力は湧き水の様なもので、次から次へと湧き出てくるものの、その量は少ないものだった。そうして貯めておかなければすぐに底をついてしまうのだ。

「早く寝るんだな…じゃなきや、その剣も振るえなくなっちまう」そう笑みを浮かべて、フェルデナントは自室へと戻っていく。その背中に視線を送りながら、アーシュラは更に消せなくなっていた：フェルデナントに対する不信感が…

電話が鳴っている。それに気がついたように細い腕が受話器を取つた。

「もしもし？」

「俺だ…暇してるみたいだな…いい気なもんだ」

その向こうから聞こえてきたのは笑いを含んだ男の声。それに気分を害したのか少女は声を低くする。

「何よ、何の用もなくかけてきたなら切るわよ…私はあなたの声すら聞きたくないんだから」

「もう言つなよ、お前の行動が遅いからそつちに向かえつて言われてるんだ」、三田中にはそつちに着く事になつてゐる。その言葉に少女は受話器を落としかけた。信じられないといつよつに頭を抱えてしまつてゐる。

「嘘でしょ……こつちは厄介な事になつてゐつて言つのに……」

「厄介？何か問題でも起つたのか？」

少女の言葉に興味をもつたのか、男が食いついてきた。

「カルネラが契約者を得たわ……後はフィルネスと従う者もこの街に

……」

「そいつはいいねえ……面白い事になつてゐるじゃねえか」

「面白い？あんた正氣？神経疑うわね……全部私たちにとつてはマイナス要素ばかりよ……カルネラの契約者がフィルネス達と関わりあるようだし……」

はき捨てるようにそつ口にした少女の反応が気に入ったのか、男は笑つてゐる。

「面白いねえ……實に面白い……けどまあ、いいじゃねえか利用してさつさと目的を果たしちまいな」

「分かつてゐるわよ……居場所も掴めたし……何より……丁度使徒二人が動けない状況みたいだからね……」

そう少女は残酷な笑みを浮かべて電話を切つた。

「……急かされるまでも無いわ……アーシュラ・シルバニア……すぐにはでも殺してあげる」

言つが早いが、その姿は部屋を後にした。

空を見上げる。星も見えない……いやもう今となつては見えない場所のほうが多いだろう。一人ビルの上でアーシュラは目を閉じて考へる。シルアとヴィグルが動けない今、行動を起こすことは得策ではない。けれどこのままカルネラを野放しにしていては、またその姿

を見失う。それでは駄目なのだ。聖乙女と呼ばれるアーシュラだからこそそれは許せない。ずっと昔から続けてきたこの戦いを終わらせる事、それこそがアーシュラの目的であり、意義だった。

その為にほかの全てを捨ててきた…人はそれを自己犠牲というのかかもしれない。けれどアーシュラにとってそれは存在意義そのものだつた。神を見失えば、今のアーシュラは崩れてしまつ。今までの総てを壊されてしまつ。

「……総ては神の御心のままに」

言い聞かせるように呟く。事実それはアーシュラにとってまじないのようなものだつた。

自分を見失わない為、縋つてているのだ…神に…

「神様なんていないわよ」

その声にアーシュラは振り返る。見たこともない少女だつた。一見普通の少女…それもどちらかといふと優等生に見える外見。

「…貴女は」

「はじめましてアーシュラ・シルバニア…聖乙女様」

馬鹿にしたように笑顔を浮かべる少女…否、実際に馬鹿にしているのだ。その片手には短刀が握られている。それでアーシュラは全てを理解した。彼女は自分を殺しにここへ来たのだと…

「そう怖い顔しないでよ…あたしは貴女を殺しに来ただけなんだから」

にっこりと満面の笑みをこぼした少女には優しさなど微塵も感じられない。

「見たところヴァンパイアでもなんでもないようだけど…死にたいの？」

ただの人間の少女、少なくともそう見て取れた。いくら凶器を手にしているからと呟つて、そんな少女に遅れをとるアーシュラではない。気になるとすれば少女が自分の素性を知っていたということ。「嫌よ、あたし痛いのは好きじゃないの…死ぬのは貴女。あ、でもその前に少しだけお話でもしましょーかー？」

あくまで無邪気にあつけらかんと言葉を続ける少女。何が目的か理解しがたいが、素性が知れない今、下手に手を出すことはためらわされた。

「神様について…」

「…断るわ、貴女のような人間に神を語られたくない」

ハツキリとはき捨てたアーシュラを、そもそも愉快なものでも見るかのように、少女が目を細める。

「語るも何も、神様なんていやしないじゃない」

その言葉にアーシュラはきつい視線を送った。

「神の代行者… そう貴女は言つけど、そもそも本当に神なんていいるのかしら? 実際に見たこと、会つたことがあるとでも? それとも人の前に姿をさらすなんて真似はしないほど崇高なもののかしら?」

「……」

アーシュラは答えない。無論少女もそんな事は分かつていて。

「それに神は本当に貴女が言つ悪を悪としているのかしら?」

「…なん、ですって」

「だからー、貴女が悪とするのはヴァンパイアや悪魔達の事なんでしょう? けど神は本当にそれを悪と定めてるの? 殺戮を繰り返す人間と、何もしていない悪魔: それはどっちが悪なのかしら?」

無邪気な少女の笑顔に対して、アーシュラの表情が固まる。ずっと昔…アーシュラが戦うことを決めた時、悪は「悪」でしかなかつた。けれど今は…? その全てが悪だと何故言い切れる?

「…っ」

考えたこともなかつた。自分の信じるもののがこんなにも脆いとはじめて知つた。アーシュラが信じる悪など…

初めから無かつたのだ。

「理解できたー? お馬鹿さん」

少女は短刀を手にアーシュラへと歩み寄つていく。けれどアーシュラの足は動かない。真っ暗になつた… ただし信じるもののが揺らいだけ…それでも…アーシュラは盲目過ぎた。それ以外何にも目を

くれなかつたのだ…人間など…「悪」の対象にすらいれていなかつた。

「ほんと…脆いわね、あなたの正義」

少女の顔が愉快そうにゆがむ。そして短刀は振り下ろされる。アーシュラの頭上に向かつて…

「嬢ちゃん…！」

声と共に、一瞬世界が揺らぐ。アーシュラに向かつてまつすぐ振り下ろされた短刀はアーシュラではない者の肩を掠めていた。目が覚めたようにアーシュラが顔を上げる。そこには酷い剣幕をした見慣れたフェルデナントの顔。

「貴方…」

「逃げるぞ」

言つが早いかフェルデナントはアーシュラを抱えて駆け出す。とは言つてもビルの上、逃げられる訳は無いと少女は高をくくつっていた。けれどその思惑を裏切るようにフェルデナントはアーシュラを抱えたままビルの屋上から飛び降りる。

「つ…？」

慌ててフェルデナントの姿を田で追うが、すでにその姿ははるか地上…しつかりと着地していた。

「何…よ、聞いてないわよ！」

想定外だつた…あんな男がいる事など…今はじめて知つたのだから。明らかに人ではない能力…そんなわけは無い…そんそん人物は、いるはずが無いのだから。

## Take 5 Alone

一人でいることが当然だった…それが当たり前で、自分自身それでいいと思っていた。

けれどどうだろう…今の自分はなんて顔をしてる？情けない…ずっと張り詰めていた自分自身の盾がなくなつてしまつた。独りが辛いなんて…思うはずはなかつたのに、その隣に誰もいないなんて当然だつたのに…寂しくて死んでしまいそり…

夜の街で、当てもなくカルネラは一人公園のベンチに座り込んでいた。初めて京右と出会つた公園。当てもなく、無意識に…そんな筈はなかつた。きっとどこかで期待していたのだ…京右が現れるのを…そんな自分に気づいて、情けなくて泣きそうなのに、涙はひとつも出でこない。自分の事をどこか覚めた目で見ている自分がいた。

「……」

自分で決めたこと…それをすぐに後悔している自分がいる。情けなくて自分が嫌になる…いつそ死んでしまえば楽になるなんて…何度も考えただろう。それでも、死ぬことすら出来ない…自分という存在を失うことが怖いのだ。

「…私…本当に独りなんだ」

言葉に出した瞬間、涙が出てきた。あれだけ寂しくて悲しくて…それでも出てこなかつた涙が、こんな簡単にあふれてきた。誰かに「自分」を認めてほしくて、独りは嫌だと泣き叫びたかった。

「誰でもそうだけど…やっぱり他人がいて初めて自分が個人として確立されるのよ」

不意にフィルネスさんが口を開いたと思うと、出てきたのはそんな言葉だつた。菜月さんはまだ帰つてくる気配はなく、俺はフィルネスさんと何をするでもなく時間をつぶしていた所。

「どういう意味ですか？」

「哲学…なんだけどね、知らない？こいつの」

フィルネスさんが笑みを零しながら問い合わせてくるが、正直哲学なんてものは学ぶどころか、考えたことすらない。

「例えば坊やは自分の事を自分として認識しているでしょう？でも、他の人が全員坊やを坊やとして認めなかつたら、もつ坊やは坊やじやくなくなっちゃうって事」

「えー…つまり？」

「簡単に言えば、周りの人人が嵯峨野京右を「京右」として認識してくれるから、坊やは坊や個人としていられるって言う事」何だか坊や坊や、といわれると頭がこんがらがつてくるが、なんとなく言いたい事は理解できたような気がする。つまり、人は一人では「個人」として認められず、他人に「個人」として認められて初めてその存在が確立されるということらしい。まあ言われてみれば、周りに誰もいない状況で、「個人」などと言つてもどうしようもない気がする。

「よくそんな事知つてますね…」

「そりや、長く生きてるもの…ずっと咲、退屈な時間はよく本を読んで過ごしたものよー」

外見では決してわからないその実年齢。それでも何と無く分かる…ずっとずっと信じられないぐらい長い時間を、この人は独りで生きてきたんだと…

「だからさ…本当はちょっと心配

「へ？」

少しだけ顔を伏せて、つぶやくような声で言つ。

「あの子…きっと独りでしょ？」

その言葉に次の声が出せなかつた。そんな事ぐらいずっと初めから

分かつっていた…カルネラがずっと独りだつた事も、今も独りだとう事も…分かつている。

「フィルネスさん…」

「ん?」

軽い感じで返された返事に、少しだけ心が落ち着いた気がした。

「俺は…どうすればいいですか?どうする事が正しいんですか?…」

その問いに返されるであろう返事は予想ができた。それでも誰かに聞きたかったのかもしない。

「…それは、坊やが決めること…坊やは坊やだもの、他の人にその意思を決める権利なんてないのよ?」

「…」

俺には両手があつて、両足があつて、ちゃんと何でも自分でできる…いつだつてそうだ。決めるのは自分。

「フィルネスさん…俺は…」

少しだけ残つた躊躇。だけど、俺は俺の為に生きる事を決めた。

69

いつからか、空は雲に覆われ雨が振り出していた。

少女に襲われ、ビルの上から逃げるようにして辿り着いたのは学校だつた。行く当てが無かつたというのが正しい。フェルデナントには身寄りと呼べる人間はただ一人もいない。京右の学校へ転入してきた…それ自体が偽りなのである。

色々と下準備は必要だつたが、杜撰な管理の中、フェルデナントにとつてはそう難しいことではなかつた。今までも一人そうしてどうにか生きてきた。だから住む場所もその日任せ、肉親の顔など見たことも無い。

「…」

不意に教室の隅で座り込むアーシュラに視線を移す。この少女はどうしてしまつたのだろうか…あの少女らしからぬ霸気と威儀が感じ

られなくなっていた。

信じるもののが崩れ去つた……ただそれだけの事が彼女にとつては大きな問題。

ずっと信じてきたのだ。神といつその薄っぺらい存在だけを……それは元々何も持たず、自分以外信じこなかつたフェルデナントにとつては酷く理解しがたいものだった。それでも、アーシュラにとつてそれがいかに大切なものだったかはわかる。その姿を見ていれば……

「嬢ちゃん……」

呼びかけに返事は返つてこない。

「らしくねえな……文句の一つでも返せよ」

アーシュラの指がピクリと動く。けれどそれだけで返事を返す気配は無かつた。

「あんな言葉で崩れちまつような薄っぺらいもん……最初から信じてんじゃねえよ」

はき捨てるようなその言葉。それを耳にしてもアーシュラは声を返さない。ただ……いつも自信に満ちていたその目から、涙が零れた。

「……つ、う

聞いたことも無い嗚咽。これからも聞くことなんて無いと思つていた。

「……馬鹿じやねえか

誰にでもなく呴かれた言葉。その視線はアーシュラからはずされ、窓の外に向けられていた。会話などあるはずも無い。わからないのだ。フェルデナントにとつて、アーシュラの気持ちは理解もできない。

どうして、彼女を庇い、こんな場所で一人いるのかわからない。カルネラを殺す……それだけの為に協力していたはずで、今は使徒一人を失つて腑抜けになつた彼女になど用も無いはずだといつのに、その場から離れる気にはならなかつた。

「なあ……」

独り言のようだ……

「頼むから…」

それでもハッキリと聞こえる声で…

「泣くなよ」

それしか言えない。大切なものなど持ったことも無い、これからも持つつもりなどないだから理解できない。でもせめて、その嗚咽だけでも止めたくて、そう口にするしかなかつた。

雨が降る暗い夜道に似合わない姿。それを見つけ、足を止めた。

「京右くん？」

「へ？」

声をかけられ振り向いた京右の目に映つたのは、クラスメイトである折原百々撫の姿。もう深夜といえる時間にその姿を目にすることは不思議な感じがした。彼女、百々撫は学校でも優等生でとおつていたはずだ。それが今日の前にいるのだから。

「どうしたの…こんな時間に？」

そう問い合わせられるが、どちらかといえばそう聞きたいのは京右の方だった。

「折原こそ…」

「あたしはちよつと用事があつて」

にこりと微笑むその姿に微かな違和感を感じる。

そういえば彼女は京右を「京右くん」などと呼んでいたのだろうか？自分のことを「あたし」と呼んでいたのだろうか？記憶の中にいる彼女と、今日の前にいる彼女が上手く重ならない。

「そ、うか…」

どうしてか怖くなつた。こんな時間に街を歩いて、薄い笑みを浮かべて、何をしていたのだろうか？

「それより京右くん…京右くんはビデオして…？」

「……」

言葉に詰まる。言葉にしてはいけない気がした。

「悪いっ、折原！」

だから逃げるよに踵を返して駆け出す。百々撫はそんな様子を微笑みのまま見続けている。

「ばーか」

彼女らしからぬそんな声、思わずそれに振り返ると、歪んだ百々撫の顔が田に映る。それと同時に背中から何かにぶつかり、バランスを崩したようにその場に倒れてしまつ。

「……っ」

「おいおい、前ぐらいちゃんと見てよね？」

軽い声に振り向くと、そこには見慣れた青年、東上修斗が立つていた。何がなんだか分からぬまま田を見開いて固まつてしまつ。

「ほんとに… 今日はついてないんだから…」

ゆっくりと足を進めてきた百々撫が、京右の前で止まる。京右を見下ろすその田は酷く冷たいものだつた。

「まあまあ、いーじやん…ねずみが一匹引っかかつたんだし…」

おかしそうに笑う修斗。何かがおかしかつた。少なくとも京右の知る一人はこんな性格でもなければ、交友関係も無い。

「な、にが…」

思わず口から出ていたその言葉に、一人は視線を返す。

「何がどうしたって？ 聞きたいよねー聞かないままなんてやだよねー？」

修斗の声が嫌に耳に響く。

「聞く必要なんて無いわよ… だって京右くん…死ねんだから」

百々撫の言葉の意味が分からなかつた。理解する時間など与えてもらえるわけも無かつた。気がついた時にはその胸にナイフが突き刺さつていた。

「え…？」

そのまま倒れるよつにして体は地面へと崩れ落ちる。雨が溜まつて

できた水溜りが赤く染まつていく。

「さよなら」

聞いたことも無いような一人の声が耳に残る。体を起こしたいのに、重くて動かなかつた。声も出なかつた。

「あ……あ」

生まれて初めて死を間近に感じる。冷えていく体が恐ろしかつた。助けてほしいと……そう思つた。

瞼が落ちる……それと同時に、意識も途絶えた。

スツと意識が戻り、見たことも無い景色が目の前に広がる。その感覚を俺は知つていた。そう、これはカルネラの記憶の世界。彼女自身忘れているであろう、その記憶。

「……」

カルネラは暗い小さな部屋にいた。その体にはいくつもの包帯が巻かれている。

「おい」

不意に部屋の外から声がかけられ、それにビクリと体を振るわせるカルネラ。ここは部屋などではなかつた……そう、ここには牢屋だ。

「起きてたか……さつさとこつちへ来い」

扉が開かれると同時に、法衣を着た男が姿を現す。カルネラは黙つてその言葉に従う。ふらふらとした足取りで……それ以外選べる道がないように。

「これが最後だ」

男がカルネラの手を乱暴に引いてそう呟く。少しだけ表情を明るくしてカルネラが顔を上げる。けれどそれを忌々しげに見下ろした男が発した言葉は、その期待を裏切るものだつた。

「今回失敗すれば……お前は処分する」

カルネラが連れてこられたのは、一人の少年の前。

少年もカルネラと同じように、体に包帯を巻いていた。暫く見詰め合っていた二人は、やがて法衣を着た男たちによって引き連れられていいく。

「一つの力を二つに分けるなど…可能なのか？」

「おそらく…何しろ子供だ…全てを受け入れるには体も精神も幼すぎる」

「だが、万が一成功しても力が半減するのではないか？」

「成長した後、優秀な方に全てをうつせばいいだろ？…失敗しても代わりはいるのだ」

小さな子供を引き連れた男達は口々に言葉を交わす。それが何を意味するのか…俺にも、恐らく子供達自身も分からなかつた。

「悪魔は…？」

一人の男がそう口にする。それに俺は顔を上げた。

「ああ…聖乙女様が狩つて来てくれたよ」

馬鹿にした声でもう一人の男が返す。

「熱心だねえ…神様なんていやしないっていつの間に…」

「軽々しく口にするな…どこから漏れるかわからんのだぞ」

呆れた様に肩を竦めた男を、もう一人が叱咤する。

「聖乙女派なんて…もう数える程度でしょう」

「だがまだだ…まだ、使徒に対抗しえるこの実験が完璧ではない」使徒に対抗しえる実験…何のことだかは分からぬが、少なくとも、使徒や聖乙女に対して友好的でない事は理解できた。

「これが成功すれば…第一号になるわけですか…」

「ああ…悪魔の力を持つた、使徒を超える人間だ」

その言葉に耳を疑つた。悪魔の力を持つた人間？じやあカルネラは…悪魔にされたつていうのか…？

「では手術を…」

男達は重い扉の奥へとカルネラ達を連れて行く。その後に続く勇気が…俺には無かつた。見なくとも分かる。実験は成功したのだ…だ

からカルネラは生きている。

けれど… そのすべての記憶を失い… 悪魔だと… 教会に命を狙われている。カルネラが悪いわけではないのに… 一方的な理由で…

そこから意識が飛んだ。再びあたりがハツキリした時に目に入つてきたのは少しだけ背の伸びたカルネラと少年の姿だった。

「おにーちゃん」

カルネラがそう少年のことを呼ぶ。少年は小さく首をかしげた。二人には元々身寄りが無いのかもしれない。そうでなければこんな場所につれてこられて、騒ぎになつていなければはずが無い。だから、カルネラと少年は本当に兄弟のようにも見えた。

「おにーちゃんの髪の色つて、きれいだね」

カルネラは自分の灰色の髪を一度見てから、少年に目を移す。少年は確かに綺麗な青銀の髪をしていた。

「羨ましい」

そう照れたように笑うカルネラの頭を、少年は優しくなでる。

「カルネラの髪も綺麗だよ」

褒められたことが嬉しいのか、カルネラは笑みを浮かべた。仲の良さそうなその姿。少なくとも今のカルネラは幸せそうにさえ見えた。だけど…

夢の時間はすぐに終わりを告げた。

暫くして二人は引き離され、別々の生活を送つた。

それも普通の生活などではない。使徒を凌ぐ兵器として、人を殺す知識や技術だけを学ばれていく。それでもカルネラは少年を兄として慕い続けた。それだけは許されると信じていた。そんなはずはないのに…

数年経つて、二人の間に能力の違いが出てきたのか、法衣を着た男が訓練中に言葉を漏らした。

「一号と二号ですけど… どうやら一号のほうが見込みがあるよう

す

「それで…？今移植して一一号は受け入れられるのか？」

「…確實とは言い切れません…ですがゼロではないかと…」

「その会話をカルネラは片耳で聞いていた。自分が一一号と呼ばれている事も…知っていた。

「…分かった、任せよう」

一拍おいて男はそう口にする。何を意味するのか…カルネラはもう分かる年になっていた。

目が覚める。

まさかさめるとは思つていなかつた…確かに俺は折原に刺されて…冷たくなつていく体を感じたはずだつたのだから…

「目が…覚めましたか？」

聞き覚えのあるその声に顔を向ける。そこには別れた時と変わらぬカルネラの姿があつた。

「間に合つてよかつたです…今キヨウスケさんに何かあればすぐ分かるんです…だから…」

言葉を聞き終える前に抱きしめていた。驚いたように息を呑んだカルネラを気にも留めず、抱きしめ続ける。

「…よかつた、無事で…」

今まで死に掛けていた自分がこんな言葉を言つのは、酷く滑稽な気さえしたが、それでもかまわなかつた。今日の前に変わらぬカルネラの姿がある事が嬉しかつた。

「キヨウスケ…さん」

カルネラの声が震えていた。その顔を見ずとも泣いているのが分かつた。だからそのまま体を離すことではない。互いに傘を差していくせいで、体はぐしゃぐしゃに濡れていたが、それさえも気にか

からなかつた。

「ごめん…俺、カルナラの好意無駄にする」

「……」

彼女が精一杯強がつて与えてくれた好意。それを俺は今無駄にしよ  
うとしている。それでも気がついてしまつた…出会つて少ししか経  
つていないと…いうのに、俺はカルナラを守りたいと思つてる。

「俺…一緒にいるから、死ぬかもしれないとか…今の生活が全部な  
くなるとか…それでも一緒にいるから」

カルナラの腕が恐る恐る俺の背中に回される。

「いいんですか…？」

「ああ…」

返事と共にカルナラを抱きしめる力を強くする。

「…頼つても…いいんですか？」

「ああ…一人で無理しなくてもいい…」

その返事とほぼ同時に、カルナラがしつかりと俺の背中に回す手に  
力をこめた。それは本当に…ただの少女のもので…俺は少しだけ安  
心する。

「帰ろう…」

「…え？」

少しだけ体を離し呟くように言葉にすると、カルナラが目を見開い  
て声を漏らす。

「ファイルナスさんも、夏樹さんも待つてくれてる…」

「……」

「帰る場所なら…ここにあるんだから」

言葉を聞いてから、カルナラが俯く。涙を流して、小さく何度も「  
ありがとう」と呟いた。

夜が明けた。結局あれからアーシュラが持ち直すことはなく、仕方なくフェルデナントは気の抜けたアーシュラを引っ張るように学校を後にした。フェルデナント達に何かあつた事など関係なく、日常は崩れることなく繰り返されるのだから、ずっとその場にいるわけにも行かない。

けれど行く当てなど勿論なく、仕方なくブラブラと歩き回つて探し当てた廃墟へと身を置くことにした。

「何してるんだか…」

呟いた言葉は誰に当たるものでもない。あえて言うのならば自分自身にだろう。利用できると思ったからアーシュラと行動をしていた。それはアーシュラも同じことだろう。では何故…今も一緒にいるのだろうかと思つてしまつた。

「……」

泣き疲れてしまつたかのようにアーシュラは静かな寝息を立てて眠つてしまつている。

「…俺は」

カルネラを殺すためにこの街に来たはずだつた。一度アーシュラに話したことがあるように、今のフェルデナントは完全に力を使えないでいる。少し無理をすれば七割の力を使えないではないが、そうすると暫くろくに動けなくなつてしまつ。だからアーシュラと出合つた時「丁度いい」と思つた。

アーシュラがどこでどうやつてカルネラの事を知つたかは知らないが、自分ることは知らない。それならば…利用するしかないと思つた。教会の事も使途の事も知らぬ振りを通した。知らぬはずはないのに…

「俺はカルネラとは違う…」

カルネラには記憶の混同が見られる。自分の事をよく覚えていない

ようだ。けれどフェルデナントは違う。すべて覚えている。自分が何者で、何をしなければならないかを…

「時間が、ないんだよ」

その顔は余裕の無いものになっていた。一分一秒無駄にはできない。けれど目の前の少女を置いていけないのは…きっと予想していなかつたからだ。聖乙女と呼ばれる総帥がこんな少女だったと…

「…つく」

ぎりっと奥歯をかみ締める。何時からか…フェルデナントにとつて復讐がすべてになつていた。

なつていたはずなのだ…

「おはよー、『ゼロ』ます」

小さく控えめな声はカルネラのものだった。こうして朝を迎えるのは…彼女の記憶のあるところでは初めてなのかもしれない。少しだけ照れくさそうに笑つている。

「おはよー」

俺が始めて、その後に続くように菜月さんとフィルネスさんもカルネラに返事を返した。ただそれだけで幸せそうに笑つている。そんな顔に俺まで笑みが零れてしまつ。時間にすればたつた少しだ。走るように時間が駆けていったのは…それなのにこの感覚がひどく懐かしい。

「カルネラ、何か食べれないものとかあるか?」

朝食の準備をする為だろう、菜月さんがカルネラに声をかける。一瞬何を聞かれたのか分からず頭を傾げるが、すぐに首を横に振る。

「だ、大丈夫です!」

「分かつた」

慌てて返事をしたカルネラに、笑顔を返す。何だかカルネラを見ていると微笑ましくなつてしまつ。

「夏樹！あたしは目玉焼きー」

お皿を用意しながら、フィルネスさんが忘れるなよ、と釘を刺している。

「そういうえば、フィルネスさんは料理しないんですか？」

「集団食中毒になる」

不意に気になつたので、そう問い合わせると、横から菜月さんが間髪入れずに返事を返してきた。少し不服そうな顔をするものの、抗議をしないフィルネスさんを見るといふ、どうやら言葉に間違いは無いらしい。

「…そう、ですか」

何だか異様に悪いことを聞いてしまった気がしてならない。

「さて、さつさと食べるぞ」

テーブルに人数分並べられた朝食がなんとも、懐かしい。そういえば親と離れて暮らすようになつてから、こうした食事は自分も初めてだつたということに今気がついた。

朝食の間、俺達の間にはとりとめの無い日常の会話ばかりだつた。だから一瞬忘れそうになる。今自分達が置かれている状況を…

「さて、一息ついて早速で悪いが…カルネラ」

朝食の片づけを終えて、四人テーブルに着席したところで、菜月さんが切り出した。

「まだ何も思い出せないか?…どう考へても今回のことに深く関わっているのはお前だと思う。過去が分かれば相手の目的もハッキリしてくると思うんだが…」

その言葉に反論は無かつた。アーショラにしても、百々撫達にしてもカルネラに何かしら関わりがあるように見える。

「…その、やっぱりよくは覚えていないんですけど…ただ…私はずっと昔、教会にいた気がするんです」

控えめな声。その言葉にハツとしたのは俺だけだつた。俺が何度も見た夢…あれはきっとカルネラの過去だ。

「……」

けれどそれを言う事が躊躇われた。きっとカルネラにとつてそれは幸せではない過去のはずで…何の覚悟もなしに聞けるような話でもないはずだと…そう思つ。

「…あの」

でもこのままでは一步も進まない。そう思うが早いか声が出ていた。「カルネラ…お前にとつていい話じやないと思つ…けど、俺はお前の過去を知つてるかもしれない」

じつとカルネラの顔を見てそう告げ。驚いたような顔は一瞬で、すぐに薄く笑みを返してくれる。

「大丈夫です…それがどんなものでも、もう大丈夫。今は皆がいますから…」

今までと違う、それは少しだけ自信のある笑みだつた。だから俺も心を決める。まっすぐと視線を戻して、口を開く。俺が夢に見たカルネラの過去を話す為に。

そつと目を開くと眩しい光が目の中に入ってきた。それで今はもう夜が明けていることを知る。アーシュラは昨日の事を思い返すが、すぐに首を振つた。あまり思い出したくは無い。その代わりにあたりを見渡す。

「…ここは」

知らぬ場所である。というよりは、昨日の事はあまり覚えていない。フェルデナントに手を引かれるまま付いて行つただけは辛うじて覚えている。だから知らぬうちにその姿を探していた。

「…あ」

少しだけ声が漏れた。部屋の端のソファで眠つているその姿を見つける。自分が眠つていた間は起きていたのだろうと思い、少しだけ悪い気がした。それと同時に、どうしてフェルデナントは自分を庇つたのだろうかと考える。互いに利用しようと思つていたはずだ。それだけのはずだったのに…命を救われてしまった。

「ありがとう」

聞こえぬであるうつ礼を告げる。アーシュラも聞いていないと分かつてゐるから言つたのだ。すべてを信用していない。だから不利になるような事を言つたりはしない。

「…」

不意にフェルデナントの肩に目を移す。自分を庇つてできた傷、それはなんとも雑に手当されただけだった。アーシュラはだまつて手を翳す。

「…つ」

けれどそれはすぐに戻されてしまう。今の自分に神を贊美する言葉など出ない。神のその存在を疑つたわけではない、そうではないのだ。そうではなく、その心に疑問を感じてしまった自分自身が許せなかつた。ずっと昔から…聖乙女と呼ばれるようになつてからずつと、搖るがないはずだつた。この聖剣にかけて、神の変わりに戦うのだと…

「たつた数年…それだけよ」

アーシュラ自身気が付いていた。教会の中に悪があることは…全てを正しくすることなど不可能なのだ。たつた数年、アーシュラにとつてそれは本当に少しの期間。その間に大きく事は変わつてしまつた。人が悪を生み出すようになつてしまつた。許せなかつた、許せるはずが無かつた…けれどそれは…その怒りの矛先は、人には向かない。

「…私は、私には…人は殺せないのよ」

アーシュラの知らぬうちに涙が頬を伝つていて。ずっとずっと昔、アーシュラは人ではなくなつてしまつた。悪を討つ力を得た代わりに、自分を犠牲にした。それと同時に人を傷つけることも出来なくなつた。だから使徒がいる。

使徒が聖乙女の代わりに人を殺すのだ。

「…もう、私には」

居場所が無かつた。

教会が悪と呼ぶ存在は確実に減つてきている。もう聖乙女が必要とされるような戦争は起こらないのだ。だから使徒の数も徐々に減り、昔のように聖乙女を崇めるものはいなくなってしまった。人が敵に回ればアーシュラには何も出来なくなってしまう。昔のようにハツキリと、ただ悪を見据えていたくなってしまった。絶対悪などあるわけがなかつたのだ。

カルネラを見ていれば分かつたはずだ。けれど考えなかつた。存在が悪だと決め付けていた。そうしなければ自分を保つていられなかつた。

けれど今、その全てが間違いだと気が付いてしまつた。

すべて話し終えて、小さく息をついた。その後も暫くは誰も口を開かない。フィルネスさんと菜月さんは何かを思案しているようで、考え込んでいる。カルネラは…黙つて下を向いていた。

「…カルネラ、京右の見た夢つていうのは…」

沈黙を破つたのは菜月さん。思案していた顔をあげ、カルネラに視線を送る。

「恐らく間違いないと思います。思い出したわけではないですが…それがただの夢じゃないことだけは…」

「そうか」

会話はそれだけ、それでも何かを納得したのか今度は夏樹さんの視線がこちらに向けられる。

「京右、多分お前が見た夢は思つてはいる通り…カルネラの過去だと思つ。契約しているからかもしれないし、そうじやないかもしれない…それは分からぬが、夢が現実だということは確かなようだ」

「はい」

「きっと今回の事の根本に関係しているはずだ…だから些細な事でもカルネラには伝えた方がいいだろう」

俺にはよく分からぬ断片的なものだったとしても、カルネラにな

らわかるかもしれない。そういう事だろう。本音を言つならば、少しだけ躊躇われた。それはきっとカルネラにとつていいものではないだろうから…。

でもそれを選ぶのはカルネラで、俺にはどうしようもない。

「キヨウスケさん」

「？」

不意に呼ばれた声に視線を返すと、薄く微笑むカルネラの顔が目に映つた。

「ありがとうございます」

そんな言葉が返つてくるなんて思つていなかつたから、思わず目を丸くしてしまつ。そんな俺の様子を見て、カルネラが言葉を続けた。「いい話じゃないんですけど…少しだけ自分が分かりました。まだ完全に思い出せてはいないけど…それでも前進です」

最後に照れたように笑うカルネラは、初めて会つたときと同じで、ただの少女そのものだつた。だから俺も同じようにして笑う。

「そうだよな、進まないより…いいんだよな」

「はい」

小さな返事。だけどそれは確かに胸の奥に響いた。

切れかけた街灯がチラチラと目に付く。時刻はもう深夜。多少冷え込むが、そんな事を気にして入られない。

「遅い…」

耐え切れず口にしたのは少女、折原百々撫だつた。百々撫がここで待ち始めたのはもう何時間前のことだろうか。人一人通る気配のない市街地の外れ、そんな場所に不釣合いな少女が一人…おかしな光景である。

「修斗も勝手に行動して…だから嫌いなのよ、あいつ」

待ち人来たらずのこの状況もそうだが、それに付け加えるようにし

て、もうひとつ百々撫をイラつかせているのは、修斗の存在であった。本来ならばこの場所で百々撫と共に、ある人物を待っているはずなのである。

「決めた…後一分で来なかつたら帰つてやる

「惜しいなあ」

帰ると口にした瞬間、その背後から声がかけられた。驚いたように振り返るとそこには、約束の人物の姿がある。

「…ずいぶん遅い登場ね」

少女の皮肉めいた台詞を氣にも留めず、男はひらひらと手を振つて、笑う。長身だが、大男というほどの高さではなく、どちらかといえばその体も細身だった。黒い前髪は長く表情が読み取りづらい。

「で、アーシュラは？いつまで遊んでるつもりだ？」

「…つ、遊んでなんて…」

先ほどまで笑みを浮かべていたかと思えば、その目は打つて変わってきついものに変わつていた。気がついたように百々撫が言葉を詰まらす。

「聞いてないのよ…あんな奴がいるなんて…」

「あんな奴？」

思い出しただけで腹が立つ。アーシュラのそばにいるのは一人の使徒。それだけのはずだった。けれど追い詰めたアーシュラを庇い連れて逃げたのは違う男。しかも百々撫はその姿を知つていた。

「…フェルデナント…とか言つたつけ」

突然転校してきたかと思えば、すぐにその姿を消した転校生…百々撫が知るフェルデナントはそれだけの男だった。けれど実際は違う。ビルから飛び降りてもどうじない、それどころかそのまま逃げされるような男だった。

「…そいつが？」

「…アーシュラを連れて逃げたわ、どう考へても人間じゃなかつた…人間になんか逃げられるもんですか」

ギリツと歯をかみ締めて表情を歪ませる百々撫に、男は小さくため

息をついた。

百々撫と修斗はれつきとした人間。それがアーシュラを追う点で強みでもあり弱みでもある。聖乙女であるアーシュラは人を殺せない。だから使徒さえどうにかしてしまえば、人間である方がやりやすいのだ。

アーシュラがカルネラ一人を始末する為に使徒を二人連れているのもそこに理由があった。アーシュラ自身気がついていたのだろう。自らの敵がいつからか「悪」だけではなくなっていた事を…

「まあ過ぎた事は仕方がない。それよりもカルネラとフィルネスはどうなってる?」

「…それもたいした変化はないわ、契約者を始末したつもりだったんだけど…運よく生き残っているようだし」

失敗続きか、と内心笑うが声には出さなかつた。潰せるところから潰すべきだろうとは思いながらも、百々撫は自分と行動を共にはせぬだろうと事を男は知つている。

「お前は修斗と一緒にアーシュラを追え…カルネラの方は俺が探ろう」

言つが早いか立ち上がつた男は、口元に笑みを浮かべた。楽しみだと…そう感じていた。

「買い物?」

翌朝、俺とカルネラはそう声を合わせて、菜月さんとフィルネスさんに顔を向けた。返されたのは穏やかな笑み。

「だつて、二人とものんびり出来てないでしょ?出来るときに息抜きはしておくものよー」

だからと言つて、こんな時期に…とは思つが喉の奥から言葉が出てこない。正直な話のんびりとしたい…というもあるのだが、何をどう言つても言い包められてしまいそうな予感がしていたから、と

いうのが実のことね。

「暫くは使徒の奴等も動けないだろ? しな、京右の言つていた例の奴なら、カルネラがいれば平氣だろ」  
追い討ちのように菜月さんに言葉を続けられて、俺とカルネラは顔を見合わせる。

次の瞬間、返事は決まっていた。

半ば無理矢理外出させられた、俺とカルネラは当てすらなく町を歩く。そのままではカルネラが目立つだろうと、出かけにフィルネスさんがカルネラの髪をまとめ、帽子をかぶしてくれた。そのお陰と いうかなんというか、行きかう人の視線が突き刺さるようなことはない。

「……」

会話がない。別に何がどうしたといふこともないのだが、こうして出かけてする会話が思い浮かばないのだ。おやらくそれはカルネラも一緒だろう。

「よし、カルネラ!」

「は、はい!」

急に声を上げた俺にカルネラが体を震わせる。そんな様子に思わず笑みがこぼれる。そうだ… 何も氣後れする必要などなかつた… カルネラはいつも通りなんだから…

「行きたいところ、ないか?」

今日は、今日だけは楽しんでもいいのかもしれない。折角の安息なんだから…

悩んだままのカルネラの手を引く。樂しむと決めたのだから、一分一秒でも無駄になどしたくなかった。

翌朝になつてからフェルデナントとアーシュラはやつとまともに顔を合わせることになつた。けれどもその間に会話はない。アーシュラも幾分かマシになつたとはいゝ、その目には未だ光が宿つていない。

知らずフェルデナントはため息を零していた。いつまでこんな事を続けているのだろうかと自問自答を繰り返す。そうだ、自分には時間がないのだ…いつまでも腑抜けたアーシュラに構つてゐる余裕などありはしない。

黙つて視線を向けると、俯いたまま地面を睨むその顔が目に入った。いつそのこと、殴りかかりでもすれば元に戻るのではないかと思つてしまふ。だが、そんな事は無意味でしかない。

「……」

いくら使徒の回復が通常の人間に比べて早いとはいゝ、まだ二、三日は動けないままだらう。その間にカルネラやフィルネス達が動き出しては厄介だ。それだけではない…アーシュラを屋上で襲つた人物は、確實にカルネラ達の仲間ではない。フェルデナントに思い当たる節は一つしかなかつた。

「おい、嬢ちゃん…TRINITYつて組織を知つてるか？」

返事は期待などしていなかつた、それでもアーシュラが顔を微かに上げる。

「教会つて組織は昔は一つだつた。だけど今はそうじやねえ…内部で二つに割れてる。片方は知つての通り聖乙女と呼ばれる総帥を崇める、今までの教会側だ。それと敵対するもう一つの内部組織、それがTRINITYだ」

否定も肯定も返つてこぬまま、フェルデナントは言葉を続けた。

「奴等は教会を根本から変えようとしてる。悪魔達を排除する事を目的になんてしていゝ…もう人と悪が戦うなんて事態は殆どなくなつたからな…、今の世で争つてるのは人と人だ」

「……」

「悪魔の力つてのは人の何十倍も強い、人と悪魔の戦争ならば確實

に悪魔が勝てる…だけどそのままの悪魔じゃ、人の言葉に耳を傾けることもしない。そこで、どうするか分かるか？」

返事はない。ただ少しだけ、アーシュラのその目に光がもどつくる気がした。

「悪魔の力だけを、悪魔から取り出せばいい」

「…悪魔の力」

「生物には核があるだろ？当然悪魔にもそれがある…それだけを別のものに埋め込んじゃよ」

淡々と言葉を続ける。アーシュラも黙つてその言葉を待つた。おそらくその実態をアーシュラは知らない。TRINITYという存在は知つても、それが何を行つてきたかなど知らないだろう。

「核を埋め込むとなれば対象は動物だ…だけど獸じや知能レベルが低すぎる」

「…まさか」

「そのまさかだ…悪魔の核を人に埋め込んだ」  
息を呑む。まさかそんな事を行つているなどと予想すらしなかった。否、そんな事は不可能だと思つていた。

「勿論、簡単な話じやない…拒絶反応を起こさない人間のほうが珍しい」

「……けれど、成功したのね」

小さな声に頷くと、アーシュラが忌々しげに眉を潜める。自分は何をしていたのかと…そう思つていてるのだろう。

「適合者が現れる確立は千分の一程度だがな、とは言つてもそれも十年ぐらい昔の話だ。今…どうなつているかは検討もつかない…」

「どうして…、あなたはそんな事を知つていてるの？」

当たり前の疑問。恐らく問い合わせられるだろうと「…」とも分かつていた。分かつていて話したのだ。

「…簡単な話だ、俺はTRINITYに悪魔の核を埋め込まれた。だから…全部知つてる」

息が止まつた。アーシュラは聖乙女として今まで生きてきて、これ

まで悪魔の気配を逃したことなどなかつた。だからこそ…悪魔の力を持つた者を見逃すはずなかつたのだ。

「そんな、私は何も…」

「当たり前だ」

言葉を察したような間髪入れぬ返事。アーシュラが視線を向けた先には、背を向けたフェルデナントがいた。

「…俺が核を埋め込まれた際に使われた悪魔の核は半分だけ…もう半分は別の人間に埋め込まれた。そいつは悪魔の力を十分に手に入れたが、俺はその力を十分に手に入れられなかつた」

「どういう…意味?」

意図がはつきり分からず、問いかけるアーシュラに、フェルデナントは小さく息をつく。

「つまり、俺は失敗で…そいつは成功したって事だ。そいつは悪魔に近いから嬢ちゃんも感じられるだろうが、俺は人間に近いせいで感じられないんだろう」

「…そう、じゃあ貴方も…悪魔なのね」

短い言葉。アーシュラが聖乙女である限り、その意思を今まで通り突き通す限り、フェルデナントも悪として切り伏せねばならない存在に違ひなかつた。

「ああ…人を傷つけられない嬢ちゃんに、俺が殺せるかは知らないけどな」

「！」

「聖乙女は人を殺せないんだろ?でも使徒はそんな制約を受けない。だからTRINITYは最初に障害になるであろう使徒対策に俺達を使おうとした。まあ…それが終われば金儲けに精を出すつもりだつたんだろうが…」

呆れた様な言葉に、アーシュラは視線を落とす。

「…全て知っていたのね…最初から、私が聖乙女であることも…」

返事は返さないが、無言は肯定の証でもあつた。

「いいや、気がついたのはしばらく経つてからだ…本当に最初は、

「こんな子供が聖乙女だなんて思わなかつたさ」

「……」

それでも、アーシュラが教会の人間であることは分かつっていたのだろう。そう考えて言葉がつなげなくなつた。アーシュラのほうが完全に利用されていただけと言つことだ。

「どうして、そんな事を話す氣になつたの？例え私が貴方を殺せな

かつたとしても、使徒に命じれば貴方は追われることになるのよ？」  
「さてな、気まぐれだ」

簡単な返事を返されて、アーシュラは言葉を失う。そんな適当な返

事を信じる氣になどなれなかつた。

「理解できないわ…自ら敵を増やすなんて……」

そう言葉にするものの、アーシュラがフェルデナントに剣を向ける  
気配はない。

「そう、だな…初めて会つた時だ」

「…？」

「あの日、助けてもらつた借りが残つてるだろ…あの分だと思つて  
黙つて聞けよ」

一度だけ視線がかみ合つ。その日があまりに真剣だったせいか、アーシュラは口を噤む。

「嬢ちゃんを狙つてきたのはTRINITYの奴らだ。相手は人間  
と、意図せず悪魔つていう兵器にされた元人間…。何を悪とするの  
かは嬢ちゃんの自由だ…けどな、他人の言葉で簡単に折れちまうよ  
うな信念なら捨ててしまえ」

簡単に折れてしまつた心の剣。仮初の剣ならば捨ててしまえばいい。  
「カルネラも、TRINITYに核を埋め込まれた人間だ。忘れる  
なよ…元々は人間で、それを望んだわけじゃないって事を…。それ  
でも、その全てを悪だつて言つなら今まで通り戦い続ける

「貴方も…悪になるのよ」

それでも…次こそは貫いていけるのなら、また剣を握ればいい。

「…今更だな、元より俺と嬢ちゃんは敵同士だろ」

一が零に戻つただけの話だつた。

「次に会つのは…どつちかが死ぬ時だらうな」  
言葉と共にフェルデナントが歩き出す。一步、二歩…すぐに扉まで  
たどりついた。その間…アーシュラは何も言わず、その背中をただ  
眺めていた。

「……」

何かを言いかけて、結局無言のままその背は部屋を後にしてしまつ。

「……理解、できないわ」

呟いた言葉に返事はない。どうしてそんな話を…そう思うが、すぐ  
に首を振つた。きっと今はそんな事を考えているときではないのだ。  
そう…悪を、見定めなければならない。

帰り道、俺とカルネラは小さな公園で足を止めた。何をする訳でも  
なかつたが、ベンチに腰掛ける。

何も言わずに流れるような景色に目を映していた。子供の姿はもう  
まばらになつてゐる。もうすぐ口が暮れるのだ。

「なんとなく、なんですが…思い出せたんです」

つぶやくような声。俺はそれに視線だけを返す。

「私は、小さい頃施設で育ちました…本当のお母さんはいなかつた  
けど、キョウスケさんの話してくれた人のこと…覚えてます。優し  
くて、元氣で…一緒にいると楽しかつた。でもたまに…一人のとき  
に悲しそうな顔をしてました」

きつと、ずっと昔その人は教会と関わりがあつた。何があつたのか  
は分からぬ。だけどそれは、その人にとつて良い事ばかりではな  
かつたのだろう。

「今なら…なんとなく分かります。先生は使徒つて呼ばれる人達と  
同じで、何かしてしまつたから殺されたんですね…」

「多分…な」

うまく返事が返せない。どう、言葉にすればいいのか分からなかつ

た。

「悲しく…なかつたでしょうか？辛くは、なかつたでしょうか？」

カルネラの手が震える。その目には涙が浮かんでいた。

「先生…笑つてました。最後の最後まで…私に笑つてたんです」  
きっと、幼かつたカルネラにその笑みの理由は分からなかつたのだろう。今でさえ、全てを理解なんて出来るわけが無かつた。当たり前だ…その人は、全て自分の中で過去を消化しようとしていたのだから。

「私は、あの日先生を助けられませんでした。どんな理由があつたとしても、先生がそれを受け入れていたんだとしても、私は…やっぱり嫌です」

理不尽だ。そんな理不尽な理由で誰かが命を落とすなんて嫌だつたんだ。だからカルネラは…

「俺も、嫌だ…」

やつと動かすことが出来た手でカルネラの頭を撫でる。泣きそうなカルネラをみて、そんな事しか出来ない自分が居た堪れないが、何もしてやらないよりマシな気がした。

「…キヨウスケさん、全部…話してくれてありがとうございました」  
目にたまつた涙をぬぐつてカルネラが視線を返してきた。真つ直ぐとした目。

「私、別に教会と戦いたいわけじゃありません。でも…私は、私は助けたい人がいます」

「助けたい…人？」

鸚鵡返しに向けた言葉に、カルネラは迷わず口を開く。きっとどこかで予想していた、続く言葉を…

「私は、お兄ちゃんを助けたい」

## Take 7 Reason

夜、その全てが闇に包まれることなどなくなつた世界。

街頭の光は未だ光を灯し、街行く人の影も少なからず見受けられる。そんな様子をビルの屋上から見下げる一人の男。

「さて、どこに隠れているやら……」

男の口には笑みが浮かぶ。百々撫と別れてすぐ行動を開始した彼は、見晴らしのいいビルの屋上へと足を運んだ。暫くジッと街を見下ろす。常人には決して見ることができないであろう遙か彼方すら男には見えていた。

「ああ…見つけた」

楽しげに喉が鳴つた。事実男は楽しみだと感じている。

一瞬だけ強い風が吹く。次の瞬間、男の姿はビルの上から消えていた。

ビクッとカルネラの体が震える。

「 っ」

見ればその顔は青く染まつていた。何がどうしてしまったのか分からぬ俺は、カルネラの顔を覗き込む。

「カルネラ？」

「駄目…来る…」

呟く様な小さな声だつたが、その言葉ははつきりと聞き取れた。『

来る』それは教会の人間が…という事なのだろうか、それとも…

「キヨウスケさんっ！逃げてっ！！」

急に立ち上がりつてカルネラが叫ぶ。驚いて立ち上がるが、当然逃げるなんて事はできない。当たり前だ。

そう思つた瞬間、意識とは別に背筋が凍りつく。息ができない。声

が出せない。指一本すら動かせない。『何が』と問う前に分かつた。これは教会なんかじゃない。あんな優しいものなんかじゃない。それは……

### 絶対的な殺意

「こんばんは」

柔らかい声。けれどそれには全く感情が感じられなかつた。

「貴方は……」

カルネラの声に、恐る恐る視線の先を追つことができた。そこに立ち尽くしていたのは全身を黒で包んだ長身、細身の一人の男。ただそれだけなのに、相変わらず声が出せない。

「結構手間取らせてくれたみたいだなあ……」口からはお陰で色々大変なんだ

俺達の様子などまるで気にしていないよ」、肩を竦める。

「あーでも、あれには感謝しているよ……聖乙女の使徒を瀕死にしてくれた事。まあこっちとしては殺してくれた方が有難かつたんだけど」

言葉に返事が返せない。その体から発せられる殺意から、俺達の敵である事は明白だった。だが男は聖乙女の使徒を瀕死にしてくれて、ありがたかったと言つている。

「TRINITY……」

「そうか、カルネラも思い出したんだな」

TRINITY……聞いたことのない名前だった。カルネラの顔がみるみる青くなつていく。それに相反するよつに男の口が釣りあがる。「何を……しに来たんですか」

「何？ああ……連れ戻しにきたとでも思つてるのか」

馬鹿にしたように笑う。ひとしきり笑つた後、スッと真顔に戻つて視線を返す。

「残念ながら、もうお前もあいつも不需要だ……処分しに来た」冷たいはつきりとした言葉。その言葉の意味がはつきりと分かつているのに体が動かない。どうすればいいのか思い浮かばない。ただ

頭の隅で警報がなり続ける。

逃げる

逃げる、二ゲロ

一瞬、静寂の中で響いた物音に、カルネラの手を引いて駆け出す。

「！」

そんな行いは無意味だと分かつている。分かつているがそれ以外にどうすればいいのかが分からぬ。だから全速力で走り抜ける。それしかできないかのように……だが、それすらもできないのだと知る。

「逃げられるわけないだろ？」

目の前に佇む男。駄目だ。逃げ切れるわけがない……死んでしまう……

「キヨウスケさんっ！」

目の前が真っ暗になつた瞬間、カルネラの声に引き戻される。必死な顔が目に映る。

そうだ、まだ諦めるには早い。まだ何もしてはいない。

カルネラに頷きを返したとほぼ同時にその手を強く引かれる。少しきらだのバランスを崩しながらも、どうにか倒れこまことに足を踏ん張る。視線を元に戻せば、俺の前に立つカルネラの背中が目に映つた。

「絶対……キヨウスケさんには手出しさせない」

まっすぐと男を見据えながらカルネラは構える。だが、男は微動だにしない。少しだけ考えるそぶりを見せ、納得したように笑みを浮かべた。

「キヨウスケ……そう京右だ……確かに契約者の名前だったな」

「っ！」

カルネラと俺はほぼ同時に息を呑んだ。男の視線が俺に定まる。

「キヨウスケさんっ、逃げて！！」

それは叫び声に近かつた。声とほぼ同時に駆け出したはずの俺の体は……その場に倒れこむ。

「つぐ

その衝撃に眉を潜めた。だが気がついていなかつた。それよりももつと…恐ろしいものが迫つてゐるのだと…

「キヨウスケさんっ！！！」

その声が、意識が途切れる前に聞いた…最後の声だつた。

そつと目を閉じた。もうすぐ夜が明ける。アーショラは祈るように手を組み、跪く。

フェルデナントが出て行つてから、アーショラはすつとこの場所で考えていた。自分にとつて悪とは何なのか、自分にとつて戦う理由は何なのか…

「…全ては神のお心のままに…」

心にずっと植えつけてきたその信念。それが正しいのだとずっと言い聞かせてきた。否、正しいと信じていた。けれど、『…他人の言葉で簡単に折れるような信念なら捨てる』そう言つたフェルデナントの言葉が頭から離れない。本当に折れてしまつたのだろうか？たつた一言で、簡単に折れてしまつたのだろうか？ずっとずっと…戦うと決めたあの日から…誓つたはずなのに。

「私はどうすればいいの…ルイス」

泣き言など、ずっと言わなかつた。

神に選ばれたのだと…その日から、自分を捨て、家族を捨て、ただ神の為だけに生きてきた。

「全て無駄だつたの？」

思えばあの日、あの剣を手にしていなかつたなら、どうなつていたらう。

ただ普通の少女として、生きて死んでいたならば…愛しい人を失う

事もなかつたのだろうか？

「…私はつ、何の為に戦えばいいのつ！」

遠い昔、神のために全てを捨てた。だからこそそれは絶対であり、同時に自らの存在意義でもあつた。ここで神を切り捨てたとすれば、過去にアーシエラが失つた全てのものは無意味にすら感じられた。自分の過去を無に返すことなどできない。それには失つたものが大きすぎる。大切なものを全て失つて手にした剣を、捨てるなんてできぬ。

「こんな事…私は望んでいなかつた」

その剣を手に取つたのは大切なものたちを守るため。それは決して多くではなかつた。

「…ルイス」

ただ一人、たつた一人を守りたいが為だつた。その為に全てを捨て、その剣を手に取つたのに……

「どうして、貴方はいないの…」

誰も傍にはいなくなつていた。

遠い遠い昔の話。

アーシエラ・シルバニアは小さな田舎町に生まれ育つた普通の少女

であった。人より少し信仰心の強い面はあったが、それも他者とそ  
う大差を付けるような問題ではなかつた。そんな普通であったはず  
の少女の運命を変えたのは、本当に些細な出来事からであった。

12月24日、アーシュラの12の誕生日に運命を変えるその男は  
尋ねてくる。

その日、アーシュラと両親はささやかながら誕生日パーティーを行  
なつていた。パーティーと言つてもそんなちゃんとしたものではな  
い。いつもと変らぬ夕食にケー キ代わりの菓子パンがあるだけ。そ  
れでも幼いアーシュラにとつては雰囲気と特別な日だという気分の  
スペイスだけで、十分なパーティーになる。ただ幸せな気分を味わ  
いながら、アーシュラはその日を終えるのだと思っていた。けれど、  
星が空を覆う時間帯になつた時、一人の来訪者が訪れる。

軽く叩かれた扉を開けたその先に立つていたのは、一人の神父であ  
つた。信仰心が強かつたアーシュラにとつては、その姿だけでも自  
然と安心してしまう。神父は一度深く礼をした後、その視線をアー  
シュラへ向けた。

「はじめまして、私はクレイルと申します」

少女に向ける自己紹介にしては少しかしこまり過ぎた印象を与える  
それに、アーシュラは同じ様に頭を下げる。

「こちらこそはじめまして、アーシュラ・シルバニアと申します」  
アーシュラのその言葉は少しばかりませた感じを漂わせる。それで  
もクレイルは変つた様子もなく、更に優しく微笑んだ。

「思つた通り聰明な子ですね、私の目に狂いは無かつたようで安心  
しました、アーシュラ」

そう言つてクレイルは一度アーシュラから、その両親へと視線を移  
した。

「私、教会から参らせて頂きました。クレイル・オーズウェンと申  
します」

「教会？」

鸚鵡返しに返事を返したのは両親。アーシュラは神父なのだから教会から来るのは当たり前だなどと思っていた。けれどそれはアーシュラが事を知らない子供だったからからという事…

教会は、神の使者として信仰を深め、広めるだけでなく……悪魔や吸血鬼と行つた者達と戦う組織でもあつた。

「アーシュラ…私は貴方を迎えに来たんです」

「私を…？」

クレイルの言葉に素直に首を傾げる。意図が掴めないでいた。

「そうです…貴方には素養があるから…」

クレイルの言葉は事実であつた。アーシュラには教会に入るだけの素養が備わつている。ただこの時まで誰一人それに気が付かなかつただけだつた。

「私と一緒に…来て下さい、アーシュラ・シルバニア」  
優しく差出された手…それがアーシュラの運命を変えた。まるでそうなる事が運命だつたかのように、アーシュラはその手を取つてしまつた。

そしてこの日から、全ては始まつたのだ。

後日、教会総本部に連れてこられたアーシュラは圧倒されていた。この時、まだアーシュラは12になつたばかりの普通の子供なのだから、それを目にすれば当然の事だつた。高く聳え立つまるで城のように立派な教会。一瞬にしてその美しさにアーシュラは心を奪われる。

「すごい…」

やつとの事で口に出来たのはそれだけだつた。そんなアーシュラの様子にクレイルは薄く笑みを零す。

「さあ、行きましょう…貴方を待つて居る仲間がいます」

そつと手を引かれるまま教会の門を潜る。不思議と緊張はしなかつた。どちらかといえば好奇心というのだろうか、その方が大きい。

「仲間つてどうことですか?」

よくよく考えればアーシュラは教会の事を殆ど知らずに来たに等しい。だからこの時はまだ知らなかつたのだ。自分が悪と呼ばれる者達と戦うなど……

「そうですね、その話は皆がそろつてから…とこいつよろしいですか?」

そう優しく微笑みを返され、それ以上は聞く事が出来なくなつてしまつた。

暫く歩いて着いたのは少し大き目の広間だつた。扉を開けた正面には大きな天使の像が立ち、ステンドグラスから射し込む光は柔らかく美しい。思わず息を呑んだ。

「シフアン！ ルイス！ いなのですか？」

アーシュラの先を歩くクレイルが部屋を見渡しながら声を上げる。何度か声を上げて、やつとその姿が現われた。

「あ、クレイルさん帰つてきたんですね」

ひょっこり顔を出したのは、アーシュラより少ししだけ年上だろうか、色素の薄い金髪が少しあつて、くじつとした目、まだ幼い顔立ちをした少年だった。

「シフアン、ルイスはどうしたんですか?」

「えーと…それが待ちくたびれてどつか行つちゃつたみたいなんですねえ…」

シフアンと呼ばれた少年が、クレイルの問いかけにばつが悪そうに答える。決してシフアンが悪い訳ではないのだが、何となく言い辛いのだろう。

「全く…まあいいです、先にシフアンには紹介しておきます」

クレイルがした小さな手招きに答えるように、アーシュラはその側

まで歩み寄った。並んでみるとアーシュラの小柄さが目をひく。シファンも小柄な方なのだろうが、アーシュラはそれより一回り小さかった。

「彼女がアーシュラ・シルバニア…私達の新しい仲間です」「よろしくお願ひします」

クレイルの言葉に続いて、アーシュラが丁寧に頭を下げる。それにつられるようにしてシファンも頭を下げる。

「こ、こちらこそお願いします、シファン・マネリーです」

簡単な自己紹介を終えるなり、クレイルがシファンに目を向けた。「ルイスを探さなければいけませんね…手伝って下さ」シファン

「あーはい」

ルイスがフラフラと出ていってしまったのを見過ごしていたシファンに断れる訳もなく、有無を言わさぬ形でその言葉に頷いた。

「アーシュラはまだここを良く知らないのですし、待っていて下さい。出来る限り早く見つけて戻ってきますので…」

アーシュラは素直に頷く。別に待つ事自体は苦痛でもなんでもない。こんな美しい場所で待つていられるのならば全く構わないと思つていた。

「それでは、行つてきますので」

言つが早いが、クレイルとシファンは揃つて部屋を出ていってしまう。

一人ぽつんと残されたアーシュラは静かに当たりを見渡す。やはりその目に一番焼き付いたのは美しい天使の像だった。その像の前でアーシュラは静かに膝をついて、祈りを捧げるよう手を組んだ。

「神の御加護があらん事を…」

目を閉じて、暫く神に祈る。これより先、神が全てを見守つていてくれるよう、誰も傷つかぬように…そうアーシュラは祈つた。そして再び目を開き、座つて待つていようと振り返つた瞬間、一人の男と目が合つた。

アーシュラより五つ程年上だろうが、背も高く顔立ちも幼いもので

はなかつた。銀の色をした髪をぱさぱさと無造作に搔きながら、静かに歩み寄つてくる。

「……」

無論アーショラにはそれが一体誰なのは分からぬ。けれど男は迷う事なくアーショラの前で立ち止まつた。

「…お嬢ちゃんが、アーショラ・シルバニア？」

半信半疑で問い合わせられた言葉に、頷くとその男は驚いたように目を見開く。それから暫くアーショラの姿をまじまじと見つめた後、たつた一言だけ呟いた…

「ちつさつ…」

その瞬間アーショラの頭にまるで石でもぶつかつたかのような衝撃が走つた。当然ながらショックを受けただけなのだが…あまりにショックが大きすぎてついアーショラは手を上げる。

「…！」

パシンッという大きな音が響き、アーショラの手は男の頬を叩いていた。

それが最悪とも呼べる出会い。

彼こそがもう一人の仲間であるルイスだと知つたのは…その少し後の事だった。

男の名はルイス・レント。それがすぐ今の事だと分かる程、彼の頬が腫れていた。アーショラとルイスが互いに自己紹介を終えたのは、本当に先程…それからというもの、ずっと氣まずい雰囲気が流れている。

「まあ…あえて何があつたのかは聞かない事にします」

「いや、そこは普通聞くだろ！…」

冷静にそう言つてのけたクレイルに激しく突つ込みを入れたのはルイスだつた。

「どうせ聞いてもろくな事じやないのは分かりきつていますし…時間の無駄でしょう」

傍目から見ていても分かる程にクレイルはルイスに対して冷たい。すっぱりルイスの抗議の声を切りさつて、クレイルはアーシュラに向き直る。

「アーシュラ…貴方に話しておかなればならない事がいくつかあります」

ふと優しいながらも真面目な顔つきになつたクレイルにアーシュラは無言のまま頷いた。

「まず、この教会という組織について…アーシュラは神に祈りを捧げ、人々の懺悔を聞き、迷い人を導くのが教会の、神父達の役割だと思つていますね？」

「…違うのですか？」

純粹な疑問だつた。アーシュラはそれこそが教会の役割だと思つていたし、事実殆ど的人がそう思つてゐるだろう。

「勿論それも…教会の役割です。でも実はもう一つ…重大な役割を持つてゐるんだよ」

まるで秘密の話でもするかのよつに、クレイルは口元で指を立ててみせた。

「それが悪といわれる者達から人々を護るという役割、神の使者として神の代りに悪を裁く存在…それがもうひとつ教会の姿なんです」

「悪を…裁く…」

鸚鵡返しのよつについ呴いてしまつた。そんな言葉を聞いても急には理解できない。アーシュラはそれが「悪」とはなんなか具体的なものを知らないせいなのだと思つた。

「アーシュラ、我らが敬愛する神や天使がいるよつて…悪魔やその類の者達も存在しているのです」

瞬間的に、それが悪なのだとアーシュラは理解した。信心の強さからか、同時に納得もしたのだ。

「我々はエクソシスト、魔を狩る神の使者なのです。そして……貴方にもその素質がある」

素質と言われても、いまいちピンとはこなかった。何の変哲もない村で育ち、生きてきた自分に何があるというのか……アーシュラはそう思うが故に返事が返せなかつた。

「神を思う心……それが本物であるならば、ほかに必要なものなどないのですよ、だから安心して下さい……アーシュラ」  
神を思う心、アーシュラにとってそれは搖るぎ無いものだつた。だからその言葉に今度は頷く。神を思う事なら、敬愛する事ならば自分にも出来る。そう思つたから……

「私に……出来る事があるなら……」

恐る恐るながらアーシュラは言葉にする。その時、正直に言えばまだ見ぬ悪という存在を恐れていた。しかしそれも当然の事……この時アーシュラは、まだ12の少女だつたのだから……

アーシュラが教会に来てから、一年の時が流れた。

その間にアーシュラが知つた事、それは悪魔やその類の者達が実際に存在するという事。そして人知れずその者達の犠牲になつている人々がいる事。

はじめて悪魔と対峙した時の事をアーシュラは一生忘れないだろうと思つた。

床や壁に飛び散つた血、鉄の臭い。千切れた肉の断片、そこからこぼれ出した臓物。そして皮膚の剥き取られた首から下のない頭を持

つた悪魔が一人、楽しげに笑いながら佇んでいた。それがアーシュラがはじめて悪魔と対峙した時に見た光景。

目の奥が痺れた。声が出なかつた。足が動かなかつた。初めて恐怖をその身に感じた瞬間だつた。

その時、動けなくなつたアーシュラを助けたのはルイス。その瞬間からそれまでアーシュラがルイスに持つていた苦手意識は消え去り、違う意識が生まれ始めた。

「またそんな所にいたのね…」

空を見上げる様にして声を上げたのはアーシュラ。正確に言つなれば空を見上げている訳ではなく、屋根の上にいるルイスを見てのことだつた。

「なんだ？ 何が用か？」

「別に用なんてないけど…」

ただ目に付いたから声をかけた。そんな風にアーシュラはそっぽを向く。そんな様子を見て、ルイスが屋根の上から飛び降り、アーシュラの前に立つ。

「何よ？」

目の前にたたれてしまつとアーシュラは完全にルイスを見上げなければならなかつた。それほどに二人の間には身長差がある。

「いや、相変わらずちつせーなーと思つただけだけ」

アーシュラの頭に手を置いて、馬鹿にしたような笑みを浮べたルイスに、むつとしてその手を払いのけた。

「つ失礼ね！ 伸びてるわよ！ ……三センチぐらいなら」

最後の最後だけ声が小さくなつてしまつ。この時のアーシュラの身長は一四〇センチ程しかなかつた。まだ年が年なのだから仕方がないとは思いつつも、ルイスの一言以来コンプレックスになつてしまつてゐる。

「もう少し…成長してもいいと思うぞ」

それは色々な意味を込めての言葉だったのだろうが、アーシュラにそれが伝わる訳もなく、ルイスのそれは嫌味にしか聞えない。

「そういうルイスは人間的に成長したほうがいいと思うけど？」

ふんつと嫌味つたらしく口にしたアーシュラは、どこからどうみても反抗期の少女のようだった。だからついルイスは笑ってしまう。

「な、何を笑ってるの！？」

「いや、これでも我慢したほうだ、許せ」

一度笑い出したせいでとまらないのか、ルイスは言いながらも笑い続けている。それに一層顔を膨らませたアーシュラ。

「み、見てなさいよ！後何年かで驚くような成長してあげるんだから！」

まるで宣戦布告のそれを笑つて受け止める。数年経てば、アーシュラは驚くような美人になるんだろうとルイスは密かに思う。

「楽しみにしてるぜ、アーシュラ」

正直な感想として返せば、アーシュラは驚いたような顔をした後、やはりそっぽを向いてしまった。

（…変な気持ちだわ）

ドキドキと動悸を繰り返す胸を抑えながら、アーシュラは俯く。いつの日からか、ルイスに惹かれていた。認めたくないけれど自身気がついていた。

ルイスを失いたくないと…目に焼き付いて離れないあの光景のようにはだけは絶対にさせたくない…

そしていつからか、それがアーシュラの戦う理由になつた…

平穏な日々はそう長く続かなかった。

日を増す毎に悪魔達は増え、その犠牲者も多くなつていつた。当然の様にアーシェラ達もそれを倒す為に駆り出され、危険と隣り合わせの毎日をおくる。分かつていたとは言えアーシェラは戸惑つ。そしてそんな迷いを書き消すように必死に戦い続けた。

けれどその日は来た。

完全に敵対した教会と悪魔達による戦争。それは悪魔達の一方的な虐殺によって始まり、微かな希望すらも打ち碎いた。

いつかはくるのだろうと覚悟していた筈だった。だといつのにそれを現実として受け止めると苦しみが胸を襲つた。激しさを増す闘いの中、シフアンが命を落した。この時アーシェラは13歳、まだその事実を正面から受け止めるには幼すぎた。

薄暗い部屋の中、眠つたように死んでいるシフアンをアーシェラとルイスは見つめていた。

「どう、して……」

瞳から溢れ出した涙は止まる事無く頬を伝う。

こんな苦しい思いをしたのは初めてだった。初めて身近な人間の死を体感した。

「…つ、う…」

泣く事しか出来ない。悲しみが世界を覆つてしまつたようだった。けれど何一つ終つてなどいなくて、むしろこれから始まるのだと言う事を心の何処かで感じていた。

「泣くな…」

優しくかけられた言葉と同時に頭を撫でられ、アーシュラは顔を上げる。

どんな顔をしていいのか分からぬといったルイスと目が合い、再び涙が溢れ出す。頭に触れる優しい手が心を揺さ振った。

泣いている場合などではなく、一刻も早く打開策を見つけるべきだと心では叫びながらも、頭が正常に働いてくれない。ただこの手を失うのだけは嫌だと強く思つた。

「お前がそんな泣く必要ない」

ルイスの言葉に返事は返せなかつた。分かつてはいても自分の無力さを感じずにはいられない。もつと力があれば、もつと自分に何か出来れば…全てを守る事が出来るだらうに…そう思つてしまつた。

「ごめんなさい…もう、平氣だから」

言うが早いアーシュラはその場を後にする。

そのままその場にいてしまえばルイスの優しさに甘えてしまいそつた。それでは何も変らない、そうアーシュラは思つ。

（私に…出来る事……）

考えながらアーシュラが辿り着いたのは、はじめてここに来た時に連れてこられた大きな広間だつた。大きな天使の像と美しいステンドグラス…アーシュラにとつて忘れられない出会いの場所。

「…主よ」

天使の像に歩み寄り、膝をつく。

「どうか…お導き下さい、お救い下さい」

縋るように祈りを捧げる。きつく握り締めた手は微かに震えていた。

恐ろしかつた、死ぬ事がではなく、失う事が…

「私の…私の全てを捧げても構いません…お救い下さい」

このままでは遅かれ早かれ皆死んでしまう。それが分かつてゐるからこそ出た言葉だつた。

「死なせたくない人がいるんです…お願い、します…私は全てを

捧げます!だからっ…！」

祈りはいつしか叫びに変っていた。喉の奥から絞り出すような悲痛な声。その目からは涙が溢れ出していた。

「お願い…私に、護る為の力を……」

その場に崩れ落ちるように両手をつく。

どれだけ祈りを捧げても、どれだけ願つても、叶えては貰えないのだと諦めかけていた。もしも祈りが届くなら、シフアンが死ぬ事もなかつただろう。

「私が護るから…神の代りに、私が護るから……」

アーシェラ達が敬愛する神は見守つてくれただけであり、何かを実行する事など無いのだと…気がついていた。だからこそ力が欲しかった。神の代りに皆を護れるだけの力が…

「力が欲しいですか…？」

不意に背後から声がした。突然の事に心臓を高鳴らせながらその声へと振り向く。

「あなた…は？」

そこには目を疑うような美しい女性が、優しくアーシェラを見下ろして立っていた。しなやかに流れる金の髪は腰まであり、その肌は雪のように白く、瞳は深い海のように綺麗な青をしている。まるで女神のようだとアーシェラは息を呑んだ。

「はじめましてアーシェラ・シルバニア、私の名はマリア・エルノアール。この教会の設立者であり、聖乙女と呼ばれるものです」

聖乙女、その言葉はアーシェラも何度か聞いた事がある。神を最も敬愛し、悪を最も嫌悪する教会の総帥。その者に与えられる称号であつた。

「聖…乙女様…」

「貴方の声が聞えました。救いを求める声が…」

その言葉にアーシェラは涙を流す。神には届かずとも、聖乙女にはその祈りが届いたのだと微かに安心した。希望という名の光を見た氣すらする。

「アーシェラ・シルバニア、力が欲しいですか？皆を護れるだけの

力が…」

優しい問いかけにアーシュラは強く頷いた。

「貴方にはそれを得るだけの資格があります」

「ではっ！」

「ですが… それは貴方から全てを奪つてしまつ。 貴方は神に全てを捧げなくてはならなくなるのです」

顔を上げたアーシュラの目に映つたのは、酷く真剣な目をしたマリアの顔だった。 その目はどこか哀しげでアーシュラは思わず言葉が出てこなくなる。

「力を得ると同時に貴方は孤独になるでしょう。 ただ一人、永遠の時を生きねばなりません。 歳をとる事も無く、剣を置く事も出来ず、人を愛する事さえも出来なくなってしまいます」

「人を… 愛する事も…？」

思わず聞き返していた。 アーシュラは分かつていたからだ、ルイスに対するこの想いがなんと呼ばれるものなのかを…

「貴方は神だけを愛し、神の為に生きなければならなくなります」

それは永遠の鎖。

「それから解放される時が来るトすれば… それは死か、神への裏切りか、新たな乙女が現わた時だけ…」

そこまで言われてようやく気がつけた。 マリアが自分に聖乙女としての力を受け渡そうとしていることに…

「もし… 神を裏切つてしまつたらどうなるのですか？」

人を愛する事が出来なくなるという事は、アーシュラが誰かを心から愛し、神よりもその人間を選べば裏切つたという事になつてしまふのだろう。

だから、それだけは聞いておかなければならなかつた。

「もし神を裏切つてしまつたり、新たな乙女にその力を渡してしまつたならば… 全ての力を失い、全ての記憶を失います。 全てを… 紙に戻されるのです」

「全てを… 失う」

それは、両親との思い出やルイス達との出会い、その想いさえも…無かつた事にされるという事だ。

「だから…選ぶのは貴方です。後悔しない様に…選んで下さー」

その言葉から暫く静かな沈黙が訪れた。

力を得れば皆を助けられるかもしれない。けれど自分の想いをなかつたことにならなければならぬ。ずっと永遠に縛られ続ける事になる。

「なぜ…私を？聖乙女様は戦つては下さらないのですか？」

押し付けがましくそんな言葉が口から出ていた。そんな自分がアーシュラは自分で信じられない。いた堪れずマリアから目を逸らすが、マリアは優しく微笑んで口を開いた。

「私にはもう…神を敬愛する事が出来ないです」

「え…？」

思わず顔をあげたアーシュラとマリアの視線が合つ。

「私は…クレイルを愛しています。クレイルも私を愛していると…そう言ってくれました。だから私は…神を裏切つてしまつ」

「でも、そんな事をしたら！全て…忘れてしまうんじゃ…」

アーシュラには分からなかつた。そんな事がわかつてているというのに、その道を選ぶ気持ちが…

「全て忘れてしまつでしょ…それでも私は彼を愛しているのです。私が忘れても、彼が覚えていてくれる…それで十分だとおもえるのです」

穏やかな優しい顔だつた。だからもうマリアは心を決めているのだと、アーシュラは悟る。

「私は…」

ルイスを本当に愛しているか分からぬ。それでも死なせたくない気持ちちは本物だつた。彼が生きていてくれるのであれば、それでいいと思えた。

だから…

「皆を護る力が欲しい」

そうはっきりと答えていた。

手にしたのは光の剣。纏つは純白の綿。輝く金の髪に、青い瞳。戦場に不釣合いな少女は、真っ直ぐと前を見据えて、立ち尽くす。誰もが予想しなかったその姿に、人々は息を呑む。少女が振るう剣の一振りで悪魔が倒れていく。

「アーシュラ……」

その少女の名を呼んだのはルイスだった。自分の目を疑う、じりじり…アーシュラが、何があったのかと…頭が混乱する。

「私が守るわ…全て…」

短い言葉だけを残し、アーシュラは悪魔の軍隊に向かつて駆けた。その速さは少女のものではなく、それどころか人のそれでもありえないものだった。ルイスはその体を引きとめようとして、その速さに追いつけなかつた。

「アーシュラ…！」

声を上げるが、それはアーシュラには届かない。

その姿を追いかけようと駆け出した瞬間、手を捕まれ引き止められた。反射的に振り返った先にいたのはクレイル。

「行つて…どうするんですか？」

「どうつて…何言つてるんだよ…アーシュラはつ…！…！」

つかまれた手を振りほどいて、クレイルに食つて掛かひとつとしたところで、言葉が詰まつた。

「まさか…アーシュラが…なんで…どうしてだよ…！」

気がついてしまつた。アーシュラが新たな聖乙女になつたのだと…気がつけども、納得できるものでもない。

「彼女が自分で選んだんです…」

「嘘だ……なんであいつがそんな事選ぶ必要がある……？」

クレイルの言葉に間髪要れず怒声を返す。

「死なせたくないからですよ……貴方を」

射るようなきつい眼差しがルイスを捕らえる。その瞬間、言葉を失つた。

「ここに来た時の様に何も知らないで選んだわけじゃない……聖乙女という存在の全てを知った上で、彼女はそれを選んだんです」

「……なんでっ」

それ以上、ルイスは何も言えなくなる。あの普通の少女が、どうしてそんな道を選ばなければならなかつたのか……どうしてそこまで追い込まれたのか、わからなかつた。

ただ尚更にここにいられないと思つた。だからクレイルに背を向けそのまま駆け出す。

「どこに行くんですか！」

背中にかけられたクレイルの声に返事も返さず、ルイスはアーシュラの駆け出した方へと向かつた。

向かい来る悪魔の残党を倒しながらアーシュラを追う。けれど普通の人間であるルイスにとつて、悪魔の相手は厳しく、その体は進むたびに傷ついていった。痛みを感じないわけではない、体が重くないわけでもない、それでも歩むことを止める事が出来ないだけだった。

「……つくそ、アーシュラ……！」

叫びに近い声を上げる。この声だけでも届けばと思う……もう遅いのだと気がつきながらも、その姿を追う足は止まらない。

その名を呼び続けながら、闇の中を駆け抜けるだけだった。

聖乙女になるには必要なものがある。

神の星の廻りに生まれ、神に愛される容姿を持ち、神を敬愛し、身も心も清らかな乙女でなければならなかつた。

ルイスは初めてアーシュラの姿を見たとき、自分の目を疑つた。

それは聖乙女に必要なものを全て持つていたから…だからクレイルが次の聖乙女にする為につれてきた少女だと瞬間的に悟つた。最初はその運命に哀れみを感じていたのかもしれない。

けれど今は違つた…哀れみなど無い。一年という期間、少女と言葉を交わし、行動を共にして、アーシュラという人物を知つた。素直にそんな彼女を好きだといえる。

だから追いかけていた。本当に自分の為にアーシュラが聖乙女になつたというならば、伝えなければならない言葉がある。

そんな事をする必要はないのだと……伝えなければならない。

駆け抜けた先で見つけたのは、血を流し横たわる悪魔の中、静かにたたずむアーシュラの姿だった。

「アーシュラ」

ルイスの声に振り返つたアーシュラは年相応の少女のものだった。微かにその瞳が揺れている。

「どうして…ここにいるの？」

「あほか、それはこつちの台詞だ。勝手に一人で突っ走つて、無茶する奴だな」

呆れたようにため息混じりにそんな言葉を吐くが、そんな言葉を口にするルイスの体の方がアーシュラよりずっとぼろぼろだった。

「こんな…傷だらけで、どうして追つてくるの…」

泣きそうな目をして顔を伏せたアーシュラに、言葉が詰まる。少しだけ考えた後、その頭に手を置いて答えた。

「そんなもん…お前が仲間だからに決まってる」

ルイスは聖乙女の定めを全て知つてはいる。だからこそアーシュラに向けた言葉はそんなものだつた。

「どうして…」

何か言おうとして、途中でアーシュラの言葉は止まつた。それ以上何も言えなくなる。

「一人で戦おうとするな、もつと他の奴等を頼れ」  
言い聞かせるようなその言葉に、アーシュラは顔を上げる。いつものように笑うルイスの顔が目に映つた。

「ルイス…私…」

言葉を続ける前に、それは斬撃に打ち消される。アーシュラの眼前が赤に染まり、飛び散つた血液が白い服に顔に跳ねた。

「あ…あ」

喉が潰されてしまつたかのように声が出なかつた。ただぐらぐらと揺れる視界で斬撃を受け倒れるルイスの姿を捕らえる。赤く染まつた身体、その影から見えた一人の悪魔。

「ああああああああああああああああ…！」

アーシュラが叫び声を上げ、剣を振りかざす。何の躊躇いも無く悪魔の身体を切り裂いた。あふれ出した血がアーシュラの身体を汚したが、そんなものは気にもならない。

ちぎれた悪魔の身体をそのままに、アーシュラはルイスに駆け寄る。

「ルイス！ルイス！」

倒れた身体に手をかけ名を呼ぶ。うつすらと目を開けてアーシュラに目を向けたルイスは、薄く笑う。

「なんて顔してんだよ…」

力なく笑うその姿に涙が止まらなかつた。

「どうして？私は力を手に入れたの…こんな傷ぐらい…」

いくら聖乙女といえど、人の傷を治すことは不可能だつた。命を作ることなど出来るわけがない。

「アーシュラ…もういい、だから泣くな

「よくない…よくないわよ！」

ルイスが死んでしまつてはアーシュラが力を得た意味がなくなつてしまつのだ。だからこそ現実を否定するように必死に首を振る。

「お願ひ……お願ひ……助けて」

誰に祈るでもなくアーシュラは泣きじゃくる。嫌だと思つて、全てを捨てる覚悟をして手に入れた力なのに、役に立つてはくれない。

「アーシュラ」

名を呼ばれ、ルイスに手を向ける。そつとアーシュラの頬にルイスの手が触れた。

「お前は……自分の為に戦え、自分が正しいと思つた事を貫けばいい……誰かのためになんて……戦う必要ないんだ」

もう遅いとしても、それだけは伝えなければならないと思つた。それが遠い未来になろうとも、アーシュラが自分でそれを選ぶその時の為にも……

「ルイス……ルイス……」

言葉が出てこなかつた。どうすればいいのかわからなかつた。助けて欲しかつた。

「忘れんなよ……お前は、自分の為に戦えば……いい……」糸が切れたようにルイスの手がアーシュラの頬から滑り落ちた。目は閉じられている。もう一度と開くことは無い。

「うつ、あ……あああああああああ……！」

小さな子供のように声を上げて泣いた。何も考えず、ただその涙が枯れるまで泣き続けた。

きつと暫くの間立ち直れない程にアーシュラは塞ぎ込むだろうとクレイルは思つていて。

けれど現実は違つた。ルイスの亡骸と共に帰ってきたアーシュラは酷く落ち着いた顔をして、ルイスを弔い、普段通り神に祈りを捧げていた。

「アーシュラ」

天使の像に跪くその姿に声をかければ、静かに立ち上がる。

「今回の事…私の責任でもあります、一人で追わせるべきではなかつた…だから

「クレイルさん」

謝罪のようなその言葉を遮つたのはアーシュラの呼びかけだつた。

「マリア様は…どうなさつていますか?」

その口から出でたのは全くもつてクレイルが予想していなかつたもの。まさかアーシュラがそんな事を今聞いてくるとは思わなかつた。

「…元気です、記憶は…無くなつてしまつたが、それでもいつも笑つています」

「なら…よかつた」

振り返つたアーシュラの顔に浮かんでいたのは笑顔だつた。目的を失つてしまつたはずのアーシュラは、信じられないぐらい綺麗に笑つてゐる。

「クレイルさん…私はこの闘いを終らせます、悪を最後まで追い続けます。神の為だけに…戦い続けます。それが私の…誓いです」言い聞かせるような言葉だつた。事実それはアーシュラが自分自身に言い聞かせた言葉だつたのだろうと思つ。だからクレイルはそれ以上何かを言うのはやめた。

「出来る限り…手伝いますよ」

手を差し伸べたクレイルに笑みを返す。少しだけ戸惑つた後、アーシュラはその手を取つた。

この日から、アーシュラにとつて戦う理由が变つた。

たつた一人だけを護りたかつた…その為に手に入れた力。けれどその護りたかつた一人は護れず、意味を失つたアーシュラは自分を誤魔化した。

『元より戦うのは神の為…それこそが私の生きる意味』

それから一日たりとも、自分が同士であつた者達の屍の上に立つて  
いるといつ事を忘れた事はない。だから…その誓いを、剣を簡単に  
置く訳には行かないのだ。

薄暗い部屋の中、アーシュラは目が覚めた。

どれほど眠つていたのだろうか…、そう考えたが實際にはそんなに  
長く眠つていなかつたのかもしれない。目が覚めた風景は、眠つて  
しまつた時のそれと変り無かつた。

懐かしい夢をみたと思う。本当に、遙か昔の事だというのに掠れも  
しない記憶。それを思い出す度に、アーシュラは胸が軋んだ。  
あの思いは何だったのか…それは今でもハッキリしない。幼すぎた  
のかもしれないアーシュラは思う。もうそんなはずはないという  
のに、今もまだ分からぬままだつた。

（…私が、戦う理由…）

それを考える度にルイスの言葉とフェルデナントの言葉が頭の中で  
繰り返された。

（私は…多くの屍の上に立つて…簡単に全てを捨てたりは  
出来ない）

戦い続けたその結果、当然とも言える犠牲者が沢山いる。アーシュ  
ラが戦い続けると決めた時から、それは避けて通れない道だつた。  
（私が全てを捨てたら…何も残らないじゃない！）

暗闇の中アーシュラは一人で頭を抱える。

捨てる事は出来ない。けれどカルネラの様な悪魔を狩る事も出来なかつた。

「私は…」

どうする事が正しいのか分からない。正しい道など本当はないのかもしれない。それでも自分の心だけは決めなければ前には進めなかつた。

（…傷）

不意に頭の中にフェルデナントの傷が浮かんだ。アーシュラを庇つて出来た傷。それは思いがけない行動だつた。互いに利害の一一致だけで共に行動していただけで、護る理由など何一つ無かつたというのに…

「…理解できないわ」

フェルデナントは借りがあつたから返しただけだと言つた。けれど、それよりも以前…夏樹と対峙した時もフェルデナントはアーシュラに手を貸そうとしていた。

「借りがあるのは…私の方よ」

口にして、はじめてアーシュラは自嘲したものがら笑みが浮かぶ。「…もう誰もいない。あの頃の皆は…だからリース、貴方の言つ通り自分の思う通りに、剣を取つてもいいかしら？」

静かに立ち上がる。真つ直ぐと前を向いて心を決めた。

何が正しいのか…どうする事が最善なのかは分からぬまま…けれど今の自分の心だけは決まった。

「主よ、お赦し下さい…」

今だけは、貴方に祈る事は出来ない。その言葉だけは口にはしない。ただ跪くのも手を組む事もその時はしなかつた。



カルネラの声は一足遅かった。否、声が間に合っていた所でそれは  
変らなかつただろう。

「キヨウスケさん！！」

叫び声を上げてカルネラが倒れた京右に駆け寄つた。倒れたままの  
京右の顔は血で赤く染まつてゐる。それが死を連想させて、カルネ  
ラは泣きながら首を振つた。

「いやつ、いやつ、嫌、嫌！！」

その否定は氣がつけば叫びにかわつていた。そんなカルネラの様子  
を顔色一つ変えずに見てゐる黒服の男。京右の首を引き裂いたのも  
当然その男だつた。

男の動きに氣がついた瞬間、声を上げたカルネラは、当然京右を庇  
おうと駆け出そうとした。けれど男の動きは一瞬。カルネラは一步  
たりともそこから動けなかつたのだ。

「まだ生きてるみたいだな少年は…止めを刺しておくか？」  
無情にも男の声がカルネラの背中にかけられる。ゾクリと背筋が凍  
つた。先程も全く動く事が出来なかつたのだ…抗つても勝てる訳な  
どない。

「…つ、あ」

助けて欲しかつた。誰か、誰でもいいから…京右の事を…  
まだ完全に暖かさを失つていない京右の身体。それがカルネラにと  
つては唯一の救い。まだ契約が切れていないのだと身体で感じる事  
が出来た。けれど…このままでは遅かれ早かれ死んでしまう。

「止め、て…この人を…殺さないで」

カルネラにとつて、それは命に代えても守りたいものなのだ。どれ  
だけ祈りを捧げても、どれほど大きく叫んでも誰も救つてくれなか  
つた。それを始めて救つてくれたのが京右…だから失いたくはない。

「お願ひ…」

勝てるわけは無いと思う。それでも抗う事しか出来なかつた。はじめからカルネラにとつてそれ以外の選択など無い。

だから願つた、神ではない何かに…

「S a v i n g t o t h e S a t a n!」

それは意図せず口から出る言葉。神に祈れぬ身ならばと声にするもの。

そしていつも……カルネラは悪魔としての姿を見せる。

「…これは、予想外だ。興味深い」

慌てた様子もなく男は喉を鳴らす。本当に面白がつてのものだつた。「それは契約者を得たからの姿なのか、それともその前からの姿なのか…是非聞かせてもらいたいな、返答によつては用なしでもなくなるかもしねないが?」

「貴方に話す必要なんて無い」

男の言葉をピシャリと断つたのはカルネラ。その姿はもう普通の少女とは言いがたいものになつていた。

「不完全であるはずのお前が、何故そんな姿になるのか…」

その姿は…黒い翼を持ち、二つの角が頭に生え、その両腕が醜く変形し、体全体に刺青のような模様が浮かんでいる。悪魔のものだつた。

「貴方に話す必要なんて無いって言つた!」

怒鳴りつけたカルネラは次の瞬間男に向かつて駆けていた。もちろん殺すために。

「是非、無理やりにでも聞かせてもらいたい」

カルネラが殺すはずだつた男は、一瞬でその姿を消し少し後ろに移動する。その動きがカルネラにはまたも見えなかつた。ひやりと冷たい汗が背中を伝づ。けれどすぐに頭を切り替えて男に切りかかつた。

カルネラの両腕はナイフのような鋭さで空を切る。おそらく触れれば鉄をも切り裂くであろう。だがそれも、触れられなければ意味がないのだ。

「 つ、く

男はいとも簡単にそれを避ける。それがカルネラの焦りを強くした。早くしなければ…早くこの場から京右を連れていかなければ…京右が死んでしまう。

「早く、早くしないと…」

気ばかりが焦つていく。焦つてもどうにもならない事は分かりきつているのに…もつと冷静になれと自分に言い聞かせているのに…どうしてもそれが出来なかつた。

失つてしまふ事が怖い。

また一人になつてしまふ事が怖い。

知つてしまつた温もりを手放すのが怖い。

「お願い…誰か…つキヨウスケさんを助けてっ！！」

浅はかだと知りながらそう声を上げて願つてしまつた。

助けて欲しいのは自分ではない。だからどうか…どうか助けて欲しいと…空を見上げた。

「 ！」

空を見上げたカルネラの視界に映つたのは、丸い月と、見知つた白い影。

ふわりと風でも纏つているかのように地面に降り立つた影は、振り返つて綺麗に笑つた。

「大丈夫？カルネラ」

銀の髪を揺らしながら影は優しい目を向ける。それに力が抜けて、カルネラはその場にへたり込んでしまつた。知らず目から溢れ出した涙が頬を伝う。

「 … つ、う… フィル、ネスさん」

そうしてやつとその影の名前を呼べた。

「キヨウスケさん、キヨウスケさんが…」

「うん、わかつてゐるわ…」

泣きじやくるカルネラに、静かな落ち着いた声が返される。それはどこか怒りを含んだ声だった。

「貴方のお名前…聞いておこうかしら」  
踵を返して男に向き直ったフィルネスが、鋭い目付きのまま声をかける。

「名乗るほどのものでもないが…」

馬鹿にしたように肩を竦めて笑う男に、フィルネスも笑みを返す。  
「あら、聞いておきたいじやない…………」

暗がりの中、フィルネスの紅い目が鈍く光を帯びる。  
肌をビリビリさせる殺氣を溢れさせながら、低い冷たい声が喉から発せられた。

「今からアンタを殴るんだから」

言つが早いかフィルネスは地面を蹴り、数メートルはあつた男との間合いを一気に詰める。それに対し驚きもせず、男はフィルネスの拳を受け流す。

そのままの勢いでフィルネスの拳は、男の後ろにある壁へと打ち付けられる。それと同時に派手な音がして、コンクリートの壁が元より柔らかいもののかのように砕け散つた。

「ごめんなさい…私、ちょっと人より力が強いから…………当つたら死ぬわよ」

ゆつくりと男に目を移したフィルネスの冷たい声は、笑っている。  
それが何よりも本気なのだと言つ事を表わしていた。

そしてそれに返事を返すように、男も口元を歪めた。

「それは…お手並み拝見とこいつじゃないか…夜の姫君」

アーシュラがやつと外へと足を踏み出した頃には、辺りは暗闇に包まれていた。

「…とりあえず、シルアやヴィグルのところへ戻らないと、何よりもまずそれが先決だと思えた。事実それが一番いい選択なのだと思います。」

けれど、顔を上げたアーシュラの目に映つたのは、忘れもしない少女、百々撫の姿だった。

「ごきげんよう、乙女様…」

分かり易い作り笑いのまま百々撫はアーシュラへと足をすすめる。

「何か…用?」

「あーら、随分と立ち直りの早い事…それとも元々神様なんて信じてなかつた?」

アーシュラの短い返事に、百々撫は不満気に悪態を吐く。それをアーシュラが気にした様子はなかつた。

「貴方には無関係だわ…用がないなら消えて頂戴」

「アンタやっぱ馬鹿ね、アタシがアンタを殺そうとしてた事忘れたの?」

大袈裟に溜め息を吐きながら歩み寄つてくる百々撫は、隠し持つていたナイフを取り出し、くるくると手元で遊び始めた。

「アンタが死んでくれないと…こつちは凄い迷惑なわけ、分かる?…けだるそうな声がアーシュラの耳に届くが、アーシュラは微動だにしない。

「そう…貴方が私を殺すというのなら、私は全力で貴方から逃げるわ」

それまでのアーシュラであれば絶対に口にしなかつたであろうその言葉に、少なからず百々撫も驚き、目を見開く。

「へえ…アンタがそういう事を言うなんて意外…」

「ええ、私もそう思うわ…不思議な話ね」

素直に驚きの声を上げた百々撫に、アーシュラは同意したように薄い笑みを浮べた。どうしてこんなにも心は穏やかなのだろうかと思

う。

「でも残念…それを許すわけにはいかないのよ…」  
言葉と同時に駆け出した百々撫は、迷う事なくアーシュラにナイフを向ける。

「そう、残念ね…私にも、譲れないものはあるわ」

百々撫のナイフを避けながらアーシュラはゆっくり後退していく。人を傷付ける事が出来ないアーシュラには逃げるしか方法がなかつた。けれどそれに迷いはない。

「今日はあの男、助けてくれないんじやない？」

「…誰も、助けて欲しいなんて言つていないわ」

空を切るナイフがアーシュラの眼前で鈍く光る。恐れる事なく、アーシュラは確実にそれを避け続けたが、ずっと後退を続けていたその足が壁につき、もう後ろには下がれない事を知らせた。

「あらそう…じゃあどうするの…？」

百々撫が振り上げたナイフがアーシュラに振り下ろされる。

瞬間、百々撫はアーシュラを殺せると思つた。

けれど…何故か腕はいつまで経つても振り下ろされない。

「…な、に？」

呟くようなその声は何故か掠れ、顔は歪んでいた。

百々撫は確かに腕を振り下ろそうとした…そう頭で意識した…けれど、それは届かない。どうしてか、それは百々撫の右腕が肩からバツサリ無くなつていたから…

「…つ、痛ああつ…！…な、なんで…つ…？」

自分の肩に手を移して、やつと百々撫は声を上げた。地面上には無造作に切り落とされた右腕が転がっている。百々撫には、自分から離れてしまつただけで、それが酷く気持ち悪く見えた。

「痛い、痛いっ…！…やだあ…」

子供のように涙を流しながら、百々撫は否定するように首を振る。

「…貴方は」

そんな百々撫を暫く呆然とみていたアーシュラだったが、ふと我に

返つたように顔を上げた。

そこにいたのは、黒い影。

「聖乙女、あんたに聞きたい事が一三あるんだが…」

「…そう、私もちょうど話が合つたわ」

慌てる事もなくアーシュラは黒い影、菜月に向き直る。少しだけ順番が狂つてしまつたけれど、それを構わないとアーシュラは自分の心中で容認した。

必要なのだ…教会でないものの力が…

冷たい風が頬を掠めた。体を凍えさせぬはずのそれが今は気にならない。

カルネラは京右の体を抱きしめながら、目の前で起こるそれをずつと見ていた。

「驚いた…アンタ、そんな体してたんだ…」

フィルネスがまるで悪態を吐くように、眉をひそめる。フィルネスが男を殺そうと振り下ろした拳は、あろうことか片手で受け止められた。そしてそれとは逆の手は醜く姿を変え、フィルネスの腹を貫いている。

「誰にも教わらなかつたか？油断は禁物だと…」

小さく笑つた男が突き刺した腕でフィルネスの腹を引き裂いた。紅い血液が地面を汚し、切り裂かれた腹からは臓物が見える。

「お生憎様…誰にも教わらなかつたわ…」

けれどそれだけでは、人間ではないフィルネスが死ぬ事などない。そんな傷は時間をかけければ治るものだった。

「さて、お前を殺す方法を教えてくれないか？」

「あら…残念ね、そんなものないわ…だつて私はヴァンパイアだもの」

よろめいたフィルネスを見下ろす男は、小さく首を傾げる。それに対するフィルネスの返事は茶化すような音を含んでいた。

「古臭い伝説のヴァンパイアじゃないのよ…銀も、木の杭も、十字架も、日の光も恐れない」

フィルネスのその言葉は真実。

長い時間をかけて人間が進化したように、それらもまた進化は続けている。

「けれど、本当に不死身な存在などありはしない」

男のその言葉も真実。

この世に不死であり、不死身な存在があるのだとすれば、世界は遠の昔にその存在のモノになつているはずだろう。

「再生出来ない程に刻めばいいか？それとも存在そのものをココから消せばいいか？」

「つ！？」

男の腕がフィルネスの首に伸びる。紙一重でそれを逃れるが、銀の長い髪がハラハラと地面に落ちた。

「女の腹に腕を入れた挙げ句、髪までバツサリなんて…ちょっと最低すぎるんじゃない？」

「それはどうも、褒め言葉として受け取つておこう」

怒氣を含んだ声に、柔らかな返事が返される。

「…ああそう、今のは本気でイラつときたわ」

未だに体からは血が流れ続いているが、フィルネスはそれを気にした風もなくゆらりと立ち上がった。

「偽物風情がよくそんな口聞けたわね…身の程つてのを教えて上げる

る

フィルネスが地を蹴り男との距離を詰める。一瞬でその間合いを無かつたものにし、振り上げられた腕が宙を切った。風を切る音が耳に響く。その腕に肉の感食はない。

その斬撃を躊した男は、ひらりとその後ろを取る。が、それも一瞬、フィルネスは体を反転させながら男に向かつて足を振る。男はそれを避ける事無く、今度は受けとめた。

「いい、反応速度だとは思つが……鈍つたんじやないか？」

「あら、貴方こそ少し悠長なんじやない？あたしが誰だか…知らなわけじやないんじよ？」

フィルネスが薄い笑みを零し、その紅い瞳をぎらつかせた。冷たい風が頬を吹きぬける。フィルネスから伸びた黒い影が地を這い、男を取り囲む。

「あんたに本物…見せてあげるわ」

黒い影はまるで炎のように揺らめき、地から這いでてくる。黒い影が男の体を足元から取込んでいく。

「あんたの存在…消して上げる」

黒い影は無の象徴。それに飲み込まれたものは全て無に帰る。存在の消失だった。

「存在の消失…くつく、残念だ」

静かに喉の奥で笑った男は、黒い影を振り払おうともせずただじつと立つている。

「元より存在しない俺には意味が無い」

「な、に…？」

一瞬耳を疑う。眼前の男の言葉の意味が理解できなかつた。

それでも直感的に理解する。この男に闇に称されるものの攻撃は効かぬのだと…

「残念だな、夜の姫君」

無駄だと悟り、黒い影はフィルネスの足元へと舞い戻る。それを当然のように男は静かに受け入れた。元よりその結果が分かつていたかのような素振り。

「あんた…女には嫌われるタイプね」

「それも褒め言葉だな…」

知らずフィルネスの口から舌打ちが零れる。なんて事だろ、打つ手建てが無くなってしまった。

このままでは自分やカルネラはまだしも、京右は確実に死んでしまう…そう考えて焦る。焦るが良い答えが見つからない。

「……夏樹」

祈るように呴いた声に返事はない。返事はないが、その眼前を青い光が包んだ。

「！」

その場にいた全員が驚いて光の方向に目を向ける。

そこにいたのは、白い絹を纏う一人の少女。アーシュラの姿だった。

「お前は…」

怪訝な表情を浮べたのは男。アーシュラの姿を見てすぐに百合撫はしくじつたのだなと思う。

「そんなに相手が欲しいのなら…私が相手になるわ」

「…それは残念ながら遠慮したい」

真つ直ぐと男を見据えたアーシュラに向けられたのは、薄い笑みと嘲笑いに似た声だった。

「今日は、身を引かせてもらおつ…では、また後日」

まるで暗闇に溶け込むように、男の姿は消える。その場にいる者全て、それを追おうとはしなかつた。それよりも何よりも、やらねばならぬ事があるからだ。

「…あ、あ

目の前にふわりと舞い下りたアーシュラに、京右を強く抱きしめながら、カルネラは恐れを帶びた声を漏らす。

「大丈夫…貴方達を殺したりしないわ」

その場に跪いて、アーシュラは薄く笑った。それに目を見開いて言葉を失う。

「でも、私には傷を癒す力はないの…だから…」

京右のその様子を目に、アーシュラは少しだけ眉を潜める。まだからつじてある息は微かなもので、いつ途絶えてもおかしくはない。

「…京右を隸属にするわけにもいかない……ともかく病院だな」

考える時間が惜しいといったふうに、菜月は呟いて、カルネラから京右の体を受け取る。

「キヨウ、スケさんは…」

じつと京右を見つめたままのカルネラは、嗚咽のせいで上手く言葉が出てこない。

「カルネラ、よく聞いて」

放心状態に近いカルネラを我に返すように、フィルネスがその肩を少しだけ強く掴む。

「カルネラの負った傷が京右にも跳ね返ると…そう言つていたわね。だつたら、京右の傷をカルネラが請け負う事も出来るはずよ」

「へ…？」

不完全だと思われたカルネラは、何故か完全に悪魔の形を得ている。だからこそ口にした言葉だった。完全とはいえずとも、それに近い状態なのであれば、不可能とは言えなくない。

「全て請け負わなくて良い…少しで良いから、試してみて」

「でもつ、私そんなこと…！」

「助けたいんでしょ！」

出来ないと、言いかけた言葉はフィルネスの怒声に遮られた。

「やる前から無理だなんて言わないで…それともカルネラは坊やの命諦めるの…？」

「…！」

もうずっと諦めていた。本当は諦めきれないくらいに、諦めようと言いい聞かせてきた。

でもそれじゃあ、ずっと何も変らない、何も救えないとカルネラは知つた。

京右に出会つて、それがどんなに無価値な事か知つた。

救つて貰つた…だから今度は自分が救うのだと決めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7895c/>

---

exorcism - illusion deity -

2010年10月10日05時20分発行